「此は私の大事な獨子である、お前達はよく命令をお遵りなさい」と言ひました。三人は「ハイ」と心の中でお答へしながら顔をあげますと、雲もなく人物もなく、もこ通りのお姿をなされたエス樣がお一人だけ立つてゐらつしやいました。エス樣は

「突然だつたので、さぞ驚いたろう」

「ハイ、どんな事になるかと思ひました……」

「今日のことは、當分誰にも言はぬがよい」

と仰せになりました。そして四人は山を降りますと、山の下にゐた弟子たちは大勢の中に圍まれてゐます、何が起つたのでせう。



群衆のなかをわけてエス樣は

「おい、今戻つたよ、お前達は何をしてゐる」

と仰せられて、四周をご覽になると五六人學者たちがゐます、この人達はエス樣のお弟子をやりこめて居たのです、一人の男は

「先生、事のおこりは斯でございます、こゝにおりますのは私の獨息子ですが、癲癇になつて火の中に轉んだり、水の中に倒れたりして困ります、それで、今日癒していただきたいと思ひ、伴れてまゐりましたところ、先生は御不在、お弟子さんに願ひましたら、お弟子さんたちは種々やつてみましたが、少しも効果がありません、……それで一同の物笑ひになつたので御坐います。

先生ドウゾ、私共親子をあはれと思召し、息子の病氣をお癒し下さいませ」

エス樣は可憐相におぼしめし、

「よろしい、此處へつれておいで……」

とお招びになりますと、またもや息子はウーンと轉んで沫を吹きました、見るさへ物凄いやうです。エス樣は

「いつから斯樣だ？」

「ハイ、幼ない時からで御坐います」

そのうちに倒れた息子は蒼青になつて息がとまつて了ひましたから、死んだのではないかと思ひました、エス樣は息子の手をお執り





になり、「モー癒つたよ、大丈夫だよ」とお言葉をかけ乍ら起しますと、死んだやうに見えたのが、忽ち癒つて了ひました。

人々は驚きました、親子は嬉しがつて歸つてゆきました、弟子達は間のわるい樣な顏しておりました。

# 隣人

あゝ物騒な街道！、エルサレムからエリコといふ邑への途中に、大きな森に挾まれて畫さへ暗いところがあります、慓剽がでゝ旅人の物を奪ることさへあるのです。

人々は夫を知つてゐますから、油斷をしません、夕方からは決して通らぬ樣にしてゐます。

ある日のこと、一人のユダヤ人は東の國へ商ひにゆかうとして、澤山の荷物を背負ひ、朝早くエルサレムを出かけました、太陽は東の





空に美しい光を擴げてゐます。

朝だから、あの暗い森も大丈夫だろうと思ひ安心しながら、テクテク歩いてゆくと、だしぬけに一人の荒くれ男が、横合からヒョイと躍りでました。此方はギョッとして怖がると、男はニヤリッと氣味のわるい笑ひをして

「モシ旅の人、こゝを通るなら酒代をおいてっておくんなさい」

よもや出まいと思つた慓剽が朝ッぱら、人通りのすくないところで一と稼をしやうといふのです。旅人は

「イヤ、私は急ぎの旅だ、そんな事いはずに退いておくれ、……」

「まア待つた」

「なに、まだ邪魔をするか」

「邪魔とは何だ、これは私の職業だ……」

旅人も負けてはゐません、慓剝はなほ更らのことです、遂々取組み合ひました、さうなつては慓剝は強い、旅人を滅多打ちにしてソツクリ裸にして逃げました。

日の光は次第に高くなりました、慓剝の姿は夙に消えてしまひました、旅人は息も絶え〳〵になつて路傍に倒れてゐます。

やがて一人やつて來る者があります、神殿の祭司といふ神主みたいな人です、オヤこれは可憐想にと思ひました、けれども待てよ、こんな者に手をかけてゐては遲くなつて了ふ、つまらない止した方が



いゝ、その中に誰かゞきて世話をするだろうと思ひながら、見ぬ振をして行きました。

しばらくすると、また通りかゝる人があります、これは學問をする人でした、憐なる旅人を見て、ヤア不憫なこと……慓剝にやられたな、何とかしてやろうか、しかし又飛んだ懸り合ひに出されると面倒臭い、君子は危きに近らずだ、と途方もないことに君子をこちつけて、ゆき過ぎました。

旅人は誰か來たと思ひましたから、苦しい聲を絞つて

「これ旦那樣、ドウゾ助けて下さい、水でも飲ませて下さい」

學者はトットと行つて了ひました。

間もなく、やつて來たのは隣國のサマリヤ人です、荷物をつけた驢馬を曳きながら參ります。フト見れば裸かにされた男がたほれてゐる、サマリヤ人は自分のことの樣に驚いて

「あア、若し〳〵しつかりおしなさい」

と抱きおこし、水筒の水を口からさしてやり、額や、肩の撲傷を丁寧に包み、自分の上衣をかけてやりました。

この親切に、旅人は漸く正氣づいて見ますと、これには驚いた、といふのは平常仲のよくない隣國の人が介抱してゐます。旅人は

「や、貴君なんといふ御親切でせう、自分の國の人でさへ知らぬ振して往過ぎるのに、……他國の人でありながら、この樣な親切



田中賢祐氏印行

を……」

と嬉しがりました、サマリヤ人は

「なに、そんなに仰しやつて下さるには及びません、まアよい案梅でした、モウ大丈夫です、こゝは路傍ですから仕様がありません、ソロ〳〵邑までゆきませう、たんと遠くもありませんから、……さ、驢馬にお乗んなさい」

手を把り、腰を抱いて驢馬に乗せ、靜かにつれてゆきました、そして宿屋に泊つて介抱してやりました、旅人も幸ひ元氣づいてまゐりました、けれどもまだ〳〵休んでゐなければなりません。そこでサマリヤ人は旅店の亭主に

「私は先を急いでおりますから、今朝たちますが、この病人は今暫くお頼み申しますよ」

「ハイ、左様で御坐いますか、御病人様は御親戚の方でゐらっしゃいますか」

「いえ、昨日はじめて知つた人なんだが」

「ぢやお客様、困ります」

「ドウして」

「ドウしてって、そんな縁故のない方を泊めたつて、お錢が戴けませんもの……」

「それは御心配下さるな、私が出しますから」





こお金を財布から出しながら

「で、もし之れで足りなかつたら、また歸途の時に拂ひます、ドウか親切にしてやつて下さい」

「へえ、それや宜しう御坐いますとも、決して御心配なく、精々御介抱申しあげます」

サマリヤ人は、その弱つてゐる旅人にも、よく譯を話し心おきなく保養する樣に言ひ殘して往きました。なんと親切な人ではありませんか、これは己の如く汝の隣を愛すといふ事例で御坐います。

# 憐な富豪

お金持になる事は結構なことです、けれどもお金よりも大切なものがある、それを忘れてはなんにもなりません、人の幸福は資産の多い少いには依りません。或るところに、大層なお金持がありました、立派な家に住んで、大勢の召使をつかつて、大した繁昌をして居ります。

家にはエジプトの織物もギリシヤの彫刻もあります、倉庫の中にはバビロンの寶物もあれば、ツロの金も澤山はいつてゐます。





毎日、お客がある、御馳走が出る、美しい着物をきた女達がお給仕をしたり、歌をうたつたりいたします。そんなお金費ひをして居ても、それで却つて儲けてゆくといふ仲々商賣のうまい人、ドシ〳〵お金が殖ゑてまゐります。

それにまた何といふ運の好いことか、毎年豐作で、穀物も野菜も穫りきれません、倉庫も納屋もはいりきれません。番頭は

「旦那樣、今年の麥の收ひごころは御坐いません、隣村かつまゐりました年貢は、仕方なし軒の下に積んでおきました、鼠や、鷄がよつて來て仕方がありません、如何いたしませう」

「さうか、それは困つたね、しかしそんなことしては勿體ない、で

は大きな倉庫を建てるんだね、さうしやう……早速積つてやらせるがいゝ」

番頭がさがりましたあと、旦那は上機嫌でニヨ〳〵しながら、何か考へて

「そうだな、これ丈けあれば利子だけでもこれ〳〵、するとこれから先どんな不景氣が續いても二十年と三十年と困ることはない」

と獨語いつて居りました。けれども神樣は

「おい、お前はお金の勘定は出來るだろう、けれどもこれから將來、二十年三十年のことがドウして解るお前の生命は何時まで續くと思ふ、痴愚な奴だ。



なる程、今丈夫だから、十年も二十年も達者だろうと思ふのが大間違ひだ、今夜にもお前の生命はないかも解らない、ソウすると

お前の財産は誰のものになる？ お前は死んで何所へゆくのだ」

お金持は蒼くなつて縮みあがりましたが、それと同時に息が絶えました。程經て番頭の來ました時、モーー冷たい體になつておりました、多分腦溢血の樣な病氣で斃れたのでせう。

ですから私共はお金や財産よりも、モット大切な靈魂のことを先きにしなければなりません、聖い人にして頂いて神樣の國に入れる者となる樣に心がけることが第一です。

そして此世の中にお金を積むよりも、他人のために盡すことは天に

寶を積むことになりますから、其方が益しです、この世の中でどつさりお金をためても、死んで自分の魂の行先に迷ふやうでは何と憐ではありませんか。



# お話三つ

## （一）

ある牧羊者が百匹の羊を持つておりました、羊はどなたも御存じの通り、大層やさしい獣です、牧羊者は此百匹を可愛がつて、毎日僕共と一しよに野原につれてゆきました。

美しい草のあるところ、清らかな水の流れてゐるところを、探し廻つて養ひました、羊はおとなしくどこまでもついてゆきますから、牧羊者はわが子のやうに可愛がりました。

さて或る日の夕方、野原から歸り、いつもの樣に小屋の入口に立つ

て、ゾロ〳〵入つてゆく羊を、一、二、三、四……と數へはじめました。

ところが不思議、九十九匹しかありません。

「ハテ、一匹足りない、勘定ちがひかも知れない、モー一度」

またも、一、二、三……と勘定しましたが、やッぱり一匹足りません。

「おや、また間違つたかな、モー一度、一、二、三……」

稍々暫く勘定してゐましたが、九十七、九十八、九十九、百とゆきたいが九十九匹しか居りません。

「あゝ矢張り足りない、……一匹ゐない、どこかで迷兒になつた



に違ひない」

牧羊者は悄然して考へこみました、僕は

「旦那樣、そんなに御心配なさらないでも、よかありませんか、たつた一匹だけですもの、其中にはまた澤山うまれます」

「……」

「ね旦那樣、それよりは、上つてお休みなさいませな、モー御飯も出來ました」

けれども牧羊者は默つてゐます、何をそんなに考へてゐるのでせう。

「イヤ、私はこれから探しにゆくよ、高が羊一匹だお金にすれば知れたものでせ惜しくはないが、私はお金でない、その羊が可憐相だ、

さぞ日が暮れて困つてゐるだろう。
夜通し迷つたら疲れて死ぬだろう、それとも狼に會つたら嚙み殺されるばかりだ」

牧羊者は晝の疲れをも忘れて、杖を片手に家を出ました、日は早や暮れて星の光が淋しくひかつてゐます。

牧羊者は歸つて來た道をその通り引返してゆきます、行けども行けども羊は居りません。

「はて、それでは溪谷の方へ行つたかな」

獨語しながら、その方へゆき、徹る聲で

「ペス、ペス……」



と羊の名を招んでみましたが、自分の聲が山彦になつて聞ゆるばかり、何の答もありません、時たま寒い風のヒューッと吹き渡る音がいたします。

ます〳〵淋しく、ます〳〵暗くなつてきました、けれども羊が見當りません、そしてかすかに狼の遠吼ではないかと思はれる樣な音がします。

牧羊者も薄氣味がわるくなつて、モー歸らうか戻らうかと幾度も思ひましたが、我慢して勇氣をだして進みました。

「ペス、ペス……」

と再び呼びますと、遠くから何やら悲し氣な聲が聞えます、牧羊者

は耳を濟ましました。

「うむ、ペスの聲？ペスの……？

耳を濟ましながら其聲をたよりに進まうとしましたが、一面に藪やら岩片やらがころがつてゐます、幾度も轉んだり躓いたりして近よります、まさしく羊が啼いてゐたのです。

牧羊者は勇みたちました、まアよかつた殺されないでゐたかと思ひながら、暗い中を手さぐりにゆきますと、こんどは相懸くひどい崖です。

「ペス、ペス、しつかりしろよ、今あげてやるよ」

と漸く手をのべ、逆さまになつて、星明に白いペスの首に手をかけ

ました。岩間にはさまつたペスは嬉しさうに惹きあげられましたが、それよりも喜んだのは牧羊者です。

羊を自分の肩に乗せ、棘にひき裂れた手足の傷の痛みも忘れて、ドンドン家へ驅けつけました。

「今歸つたよ」

「おや旦那様、お歸りなさいませ、お案じ申しておりました……羊は？」

「あゝ、これ此通りだ」

と言ひながら家の中へ入れて、撫でながら、どこも怪我をしないかと見てやりました。

「旦那様、それよりもあなたのお手はドウなさいました、おやッ腕にも血が、……」

「イヤ、これはなんでもない、私は全く嬉しかつた、お隣の旦那と向家のお爺さんを招んでおいでな、お茶でも飲まうよ」

（二）

或る家のお嫁さんが、先達お嫁入の時小父さんに戴いた十個の銀貨を着物の襟にぬいつけてお飾りにして居りました、羅馬で出來た銀貨のピカ〳〵するのですから、大さう綺麗に見えました。近所の人々も

「ね、あそこのお嫁さんは、よいお飾をしてゐます！」



「えゝ、具面の良い家から來たんですって」

「そうでせうね……」

と羨んで居りました。ところが或日のこと、常の樣にしておりますと、近所の人が

「オヤ、おかみさん、あなたのお金が一つどうかしましたか」

「えッ、……」

と氣がついて見ると一つたりません、絲がほころびてゐます、これまで十個だつたものが九個になると如何にも見つともありません、小使錢に困つて取りはづしたとでも思はれはしないかと氣を揉みました。

そこで早速家の中に入つて、そこいらを見ましたが仲々ありませんん、それにユダヤの家屋は窓が尠いのでよく見えません、手の届く限り探してもありません、もしや暗くて見えないかも知れないと思ひ、こんどはランプを持出して探しました。

外から入つてきたお婿さんは、晝中ランプをつけてゐるのを見て、

「おや何をしたんだ、ランプを點けてドウするの」

お嫁さんは耻かしいやら、きまりが悪いやら、そしてヒヨイと見れば向ふの壁の下に光るものがある

「あッこれでした、これでした」

と大よろこび、お婿さんも、ナル程探し物かと安心しました、お嫁



さんは近所の人々に

「これです、ありました、絲が切れて落ことしたのでした」

と知らせて喜びました。

(三)

ある富豪に二人の息子がありました、二番目息子の二郎は、まだ年もゆかないのに、資産をわけて貰つて、どこかに往つて勝手に暮したら面白いだろうと思ひました。そこで

「お父さま、僕これから都に出て立派な人にならふと思ひますから、資本にお金をわけて下さい」

お父様は

「その心懸は立派だけれども、まだ年も若いし考も淺いから、今すこしお待ちなさい」

となだめましたけれども、いつかな聞きません、ドウしても出てゆき度いといふのです。

仕方なくお父さまは、お金を頒けてやりました、二郎は貰ふとすぐ、モー此家に用はないと言つたやうに、間もなく旅にのぼりました。お金を持つてゐますから、何處へ往つてもチヤホヤして吳れますので、世の中は面白いものだ、親切なもんだと、大よろこび、無くなるとも知らずにお金をドシ〳〵費ひます。

なァに世の中は二郎を親切にするのでなく、お金を難有がるからで



した、その中に都につき、なす事もなく毎日、珍らしいもの、面白いものを見物してゐる中に、惡い者が寄つて來て、二郎のお金を取りあげ卷きあげて、遂々しまひには一文なしにして、突きだして了ひました。

それでも二郎はまだ氣が付きませんで、お金が無くなつたから、あの親切にしてくれる人達の世話にならうと思つて往くと、その人達は、一昨日おいでと言ふ、誰にたよつても、追ひだして了ひます。

二郎は食ふことも泊ることも出來ません、どうこも仕樣ことなしに、あの穢い豚の番人になりました、けれども折も折、麥も豆も收れない饑饉になりましたから、豚の食ふものもろくにありませんが、二

郎も食ふや食はずにゐなければなりません。

あの大富豪の息子は、なんと落ちぶれたものでせふ、これといふのも親の心に背いた爲めで御坐います。

けれども二郎のお父さまは、出かけた二郎の旅姿の見えなくなつてから、毎日〳〵、今日はどこにゐるだろう、今は何してゐるだろうと、片時も案じない事はありません、そして一月、二月と經ちました、けれども何のたよりも御坐いません。

ところが或日、お父さまは窓から外を見てゐますと、門のところに、穢い乞食みたいな男が立つてゐます、日にやけて色は赤黑く、髪は茫々、衣服はボロ〳〵、あゝ可憐相に……、時に二郎は、今頃どう



してゐるだろう、オヤさう思ひだすと、どこか二郎に似てゐる、似てゐることもあるまい、他人の空似か、イヤそれとも二郎か、まさかあんなに窶れはしまい。穢い男はジリ〳〵動いて門から少し許り入りかけて立ごまりました、ウム、入つて來れば何か惠んでやるのに奇體な男だ……と見てゐましたが、お父さまは何を考へたか、遽に飛びだしました。

「オイ、二郎ぢやないか、二郎や……」

と叫びながら、その穢い男に抱きつきました、男は地びたに坐つて

「お父さま、まことに申譯もありません、見る影もない狀態になりました、親不孝の報で御坐います、ドウゾお許し下さい……そ

して雇人と一しよでも宜う御坐いますから、お助け下さい」
と泣きました、お父さまの心はドンなでしたらう、可憐相で〳〵たまりません、熱い涙をおこぼしになりながら
「おゝ、よろしい〳〵許してやる、さ、こッちへお出で」
と手を曳いて、湯をつかはせるやら、美しい着物をきせるやら、立派な靴、光る指環までも箝させて、大よろこび
「あゝ、これで安心した、死んだかと思つてゐた息子が歸つてくれた」
と近所近邊の人々を招んで、大層な祝ひをいたしました。

＊　＊　＊



この三つのお話にドウいふ譯があるでせう、エス樣がこの三つのお話をなされた時
「この樣に、一人の罪ある人が悔改めるならば、天の神がお喜びになる」
と仰せになりました。

# 針の穴

その當時、ヨルダン河の東をペレアといひました、そこの會堂の主宰をしてゐるのは、まだ年の若い紳士でありました、紳士といへば立派な人のこと、この人は如何にも立派な人でした。

まづ行の義しい眞面目な人で、それにお家は大層なお金持、着物も帽子も靴も綺麗なものでした。こんなに何もかも揃つた紳士ならば何時も安心してニコ〳〵してゐられさうなものですのに、何の譯か何時も心配相な顏をしておりました。



或時のこと、エス樣がペレアへおいでになつて傳道をなされた時、この紳士がやつて參りました。

「先生、私はいつも考へて居りますが、つひ考へつかないことが御坐います、ドウゾお敎へ下さいませ」

「はあ、夫はどんな事です」

「ハイ、一口に申しますと永生を得るには如何すれば宜しいので御坐いますか」

「ふむ」

「私はこれまでいろ〳〵心配して考へましたが薩張りわかりませ

ん」

「それでは何をすれば善いかと言ふのですね」

「はい」

「君が爲やうと言つたって、それは仲々六づかしい、まづ神樣の規則を守ることですね、殘らず守るんですね、神樣は人殺して不可ない、泥棒していけないと仰しやったが、まさかそんな事はしますまいね」

「左樣です」

「妄證をいふては不可ない、親孝行をおしなさいとあるが、君はドウです」

「はい、夫も行つて居ります、私は幸ひと嘘をいふたことがありま



せん、また親孝行は小さい時から心がけました、近所の方々も私のことを孝行息子といふて下さいます」

エス樣はその年若い紳士をしげ〳〵御覽になつて感心してゐらっしやいました、全く珍らしい立派な紳士です、エス樣は

「ナル程、君は感心だ、それではたゞ一つの事をしさへすれば良いのです、それは君の財産を殘らず賣り拂つて、貧乏な人におあげなさい」

「え、先生なんで御坐いますって」

「あなたの財産を殘らず賣つて貧乏人にわけておやりなさい」

「……」

「さうすれば君は永生を頂戴することが出來ます」

では私の財産を賣つて永生を買ひ取るやうなものですか」

「否、さうではない、永生は神樣の賜さる物で、お金で買はれるものではありません、また善い行爲をしたからといつて貰ふ物でもありません、これは私の言ふことになんでも從ふ覺悟の人に、神樣が無代價で下さる物なのです」

「……」

「君は年若いに感心な立派な方ですが、私に全く從がはなければ、永生を持つことが出來ません、ドウです、お金があつて心に安心のない方がよいか、それとも財産が減つても心に幸福があつて、





永生を持つてゐる方がよいか考へてご覽なさい」

「……」

「つまりお金が大事か、神樣が大事かといふ事です、私のいふ通りにして、殘らず他人に施しても、また君がお金持になれない事はないのです」

若い紳士は心配さうな顏をしてゐます、エス樣はどうかして此人を幸福にして遣りたいと思召し、親切にお敎へになりました。

「ね、君！ これまで自分の義しい行爲やお金の澤山あることが、ドレ丈け君を幸にしましたか解りませんが、永生を得るにはドウしても私に從ふことです、私に從ひさへすれば、これまで罪な世渡

りをした人でも汚れた行爲をした人でも、君よりは立派な幸福な人になることが出來ます」

けれども紳士は、エス樣に從ひかねました、何百萬といふ大富豪でしたから、そのお金が惜しかつたのです、永生よりもお金に心をひかれたのです、悲し相な顏してエス樣のもとを去りました。

暫らくは涙をうかべてお見送りになつたエス樣は、弟子の方へ向きなほつて

「あゝ、お金があると天國に入ることが六づかしいな、ナゼ人間はそんなにお金を大事にするだろう、お金も神樣が下さるものだから結構だが、それよりもお金を下さる神樣の方が大事な筈だ……





こんな事では、駱駝が針の穴を通る方が容易だ」

「先生、駱駝が針の穴を通るよりも、お金持が天國に入る方が六づかしいんで御坐いますか」

「うむ」

「では、誰も天國に入れる者はありますまい」

「いや、さうでない、お金よりも神樣の尊いことが解れば、譯はないのさ」

弟子はナル程と解りました、そこで

「私達は、貴君に從ふために何もかも打棄てました、これで宜しう御坐いますか」

「よろしい、神様はキットお前達に永生をお與へ下さる、この世でも食ふに困る樣なことはおさせなさらない」

若い紳士は其後、如何なったでせう、今でも立派な人やお金持の中に斯のやうな人達が御坐います。



# 桑の樹

こゝは往昔ヨシュヤが攻め落したお話に名高いエリコ、その昔ここは少し離れたところに出來たエリコの邑、此處をある時エス樣がお通り遊ばしました。

邑の人々は、世にも名高いエス樣を見ませう拜みませうと、路も塞るほどの騒ぎです。

「ねえ、そんなに偉いお方なら、お顔を見るだけでも幸福ですわね……」

「えゝ、ホントに左様ですとも……」

あつちの小父さんも、こつちの奥さんも、お爺さんもお婆さんも出てまゐります。

エス様は十二人のお弟子とその他大勢の人々をつれて、エルサレムの方へお向ひになるところです。

此邑にザアカイといふ人がありました、大層なお金持でしたから威張つて暮せさうなものです、ところが人民に嫌はれて、交際てくれる人さへありません。

といふのは此人の職業は税吏といつて、政府に納めるお金をあつめる役ですが、人民から無暗に餘分のお金を取立るので、自分丈けは



大儲をいたしますが、皆はひどく憎んだのです。

ザアカイもエス様を見たいとは思ひましたが、人目にたゝない様にと思つて、あこからソット往きました、ところがモウ群衆が一杯で、エス様のお通りが見えません、延びあがつても見えません、この人は人並よりもズット身丈の低い男でした。

「あゝ困つたな、私もエス様を見たいが、威張つて人中にも入れないし、無理に割込んだら、若衆に撲られるかも知れない……歸らうかしら」

お金があつても人に憎まれては憐な者で御坐います、その時、ふと思ひついたことがありましたから、ニッコと笑つて大急ぎに驅けだ

しました、何處へ行くのでせう。

エス樣は、早やエリコの邑をおぬけになりました、邑の外には橄欖や桑の樹などが生へてゐます、ユダヤの桑の樹は仲々大きなもので す。

先に驅けだしたザアカイはその桑の樹に上つて、葉の繁つた中に體を匿しました、彼方からはゾロ〳〵人々がやつて參ります。

「あゝよく見える、こゝならエス樣は手にとる樣に見える……、誰にも氣付かれることもないし」

こいひながら待つてゐます、やがて人々は自分の下を通りかけます、ザアカイは何くはぬ顏で見てゐます、するとエス樣は、そこにピッ



タリお立ごまりなさいました。

ザアカイは、おや何んでお立ごまりなさることかと見てゐると、エス樣は上をご覽になり

「おい、ザアカイ、ザアカイ」

とお呼びになりました、群衆は誰も居ないのにドウしてと驚いてゐます、エス樣は

「ザアカイ、早く降りておいで、……今日私はお前さんの家へ泊るから」

ザアカイは、電氣に打たれたやうに驚きました、ドウして見つかつたか、ドウして自分の名を御存じか、それに人も嫌う自分の家へお

客に來て下さることは、全く驚かずにゐられません。

ザアカイは大よろこびでスル〳〵と降りて來て、エス樣の足もとに手をつきお辭儀をし、それから自分の家へ御案内いたしました。

人々は、まアあんな厭な奴のところへと不思議に思ひながら從いてゆきます。ザアカイはエス樣の尊いお力と御親切とをどんなに嬉しく思つたか解りません、家に着いて、なにもかも一番上等のものをエス樣にだしてお遇なしをし、それから

「エス樣、私はこれまで誠に慾深い渡世をしてまゐりました、お金は儲けましたが、すこしも嬉しいことはありません。私は今日かぎり悪いことを廢めます。



そして財産の半分を貧乏な人に施し、無理に人から取上げたものは四倍にして戻します、ヰウゾ私をお救ひ下さいませ、清い樂しい生活の出來ます樣にして下さい」

と涙ながらに申しあげました、エス樣はその心をおよろこびになり

「よろしい、お前の罪は殘らず赦して上げる、私の此世に降つたのは罪ある人を尋ねて救ふためです」

と仰せになりました、この時から、燈の消えたやうに淋しかつたザアカイの家は、神樣の御惠をよろこぶ樂しい家になりました。そして此時、エス樣は次のやうな面白いお話をなさいました。

ある所に立派な殿樣がありました、遠い國へ御用達にお出かけに

なりましたが其時、十人の家來をおよびになりました。

十人は恭々しく出てまゐりますと、殿樣は

「私はこれから、新しく手に入れた領分を受取りに往つて來るから、留守を何分頼みますよ」

「ハイ、かしこまりました」

「就てはね、お前達に資本をあげるから、私の歸るまでに、何か一儲をしてもらひたい、ドウだ」

「えゝ、宜しう御坐います、やつて見ませうで御坐います」

殿樣は喜んで夫々わけておやりになつて旅に往き、何ケ月か經つて戻つて參りました、十人は殿樣のところへやつて來て御挨拶申しあ



げる

「殿樣、お早いお歸館で御坐います」

「御都合は如何でいらつしやいました？」

「イヤ、何もかも宜かつた、留守中は御苦勞であつた、……さきに商賣は如何した」

「ハイ」

「幸助、お前は如何だつた……」

「はい、お蔭樣で頂きました資本の十倍になりまして御坐います」

「おゝ出來した、それは宜かつた、聊かの商賣にも身を入れて働いたのは感心だ、では其褒美にこんど手に入れた領地のうち十の邑

の長にしてやる」

幸助、大よろこびで引下る、次に出ましたのは賢三

「殿様、私のはお耻しう御坐いますが幸助どんの半分しか儲けませんでした、遂ひ五倍だけで御坐います」

「おゝ、よし〳〵それでも感心だ、お前を五ッの邑の長にしてあげやう」

次に出ましたのは鈍七

「殿様、私はいろ〳〵ドウしやうかと考へました、そして下手なことして儲けごころか損してはならないと思ひましたから、一層のこと大事に藏つておくが上策と、この通りチャンと包んで地の下



へこっそり埋けておきました、泥棒にでもとられては大變ですから、氣が利いておりませう、儲もしませんけれども損もしない、元々通りとは此事で……」

と包布から一包のお金を取だしました、殿様はこれを御覽になつてサットお顏の色を變へ

「なにを申す、馬鹿な奴、私は何といひつけた、商賣しろと言つたでないか、誰が藏つておけと賴んだのだ、損しちやいけない、盗まれては大變と思ふなら、銀行に預けておいたら宜いでないか、すると元金と一しよに利子もついて、それだけ儲かるぢやないか」

「……」

「天下のために働かすべきお金を隠しておくことは勿體ないことだ、不都合な奴だ」

とお叱りになりながら、他の家來にいひつけて

「鈍七のを取上げて、幸助に遣れ、こんな奴には幾何もたしても駄目だ」

鈍七は面目なげに泣いておりました。すべて神樣の私共に下さるものは何物でも自分のためにも他人のためにも使はなければなりません、心の中に頂く幸福をも他の人に話してあげなければならない、自分ひとりで匿しておくと、それが何時の間にか亡くなつて了ひま





す。

群衆は大層よろこんで、この意味の深いお話を伺ひました。その後、エス樣はベタニヤの村へとお出かけになりました、だん〳〵エルサレムにおいでになるのです。

# ベタニヤの村

エルサレムの東一里たらずの處にベタニヤといふ村があります、橄欖山を後に脊負つて、エリコ街道に沿ふた、まばらに家の列んでゐるところです。

そこにマルタ、マリヤ、ラザロといふ三人兄弟がありました、ラザロは男で二人は女の姉妹でした、お父さんとお母さんは早く世を去つたので三人は互に助け合つて生活をたてゝおりました。

幸にもエス樣を信じてゐますので、心穩かに豐でない中にも樂しく



暮しておりました、エス樣も此三人をお愛しになり、エルサレムへおいでになれば、いつもお弟子をつれて此家にお泊り下さいました、三人はこの上もなく喜んでおもてなし致しました。

氣の落ち着いてゐるマリヤは、いつもエス樣のお足元に坐つて、いろいろ解らない事や知らない事を伺ふので、時々姉さんのマルタはブツ〳〵いひながら

「ねえ、あなた仕樣がないんぢやありませんか、少しはお勝手のお手傳してもいゝでせうに……」

と顏をだすのでした。エス樣は

「いゝよ、マルタ、そんなに一生懸命御馳走しなくても宜しいよ、

マリヤは折角聽きたがつてゐるのに」

「だつて、先生、稀においでになつたんですもの、少しは……」

さて或年のこと、この二人の杖とも柱とも賴むラザロは重い病氣にかゝりました、エス樣は丁度ヨルダンの東のペレアといふ地方へ往つておいでになります、いろ〳〵手當してもラザロはだん〳〵惡くなるばかりです。

そこで、エス樣のところへ使者をだして、先生あなたの可愛がつて下さるラザロは大病ですから、ドウゾおいでを願ひますと言はせました。

けれどもエス樣はなぜか直ぐ往らっしやいませんでした、そして四



日もたつてから、ベタニヤへお出かけになりました、しかしラザロはモウ死んで了つたのです。

マルタ、マリヤは大層力を落して歎きました、近所の人々も親切にして呉れて、漸くお葬ひをだしました。

その後のこと、エス樣がお見えになつたといふのでマルタは驅けだしてお迎えにゆきました。

「先生、どうして早くおいで下さいませんでした、お早かつたら斯なことにはならなかつたでせうに……」

「否、今でも遲くない、私がラザロを活き返す事ができると信じて賴むなら、ラザロが活き返ります」

マルタは驚愕いたしましたが、あゝさうだつたと思ひなほし
「先生、どうぞ活かして下さいませ」
とお願ひいたしました、その中にマリヤもやつて參りました、ともどもお墓へつれだちました、ラザロは死んでモウ四日になりますから腐つてゐるのです、人々はそんなのを活かすか如何かと怪しんでゐます。
エス樣は、お墓の蓋の石を取退けさせ、大聲に
「ラザロ、ラザロ!! 出ておいで」
と申しました、すると薄暗い洞穴の中に白いものが動きます、オヤ何だろふと思ふ中にノソ〳〵出て來たのは、白布に包まつたラザロ





です。
一同はまさかと思つてゐましたのに、この通りですから大層驚きました、ある者は怖がつて逃げだします、マルタとマリヤはラザロに飛びついて喜びました。エス樣は
「白布を除つておやりなさい」
と仰せになりました。

# 心の香

ラザロの甦かへつた事は村中の評判となりました、それにも一つ人々を驚かしたことがありました、それは癩病になつた爲にお金持でありながら、家からも村からも追ひだされて、山の洞穴に住んでゐたシモンといふ人がエス樣のお力によつて癒つたのです。そのシモンは感謝のために大層盛んな祝宴をしてエス樣をお招びいたしました、時は四月の一日で、間もなく逾越節にならうといふ折でした。





これには村の重なる人々は勿論、ラザロも姉妹のマルタ、マリヤも招ばれてゆきました。

何しろお醫者や藥でなほらない、人には厭がられ見棄てられた病氣から、癒つたシモンは、どんなに嬉しかつたかわかりません。

やがて御馳走が運ばれました。

マルタは甲斐〳〵しくお手傳をして、御馳走を配つたり、お給仕をしたりいたしました。

家の外には他所の人々が群つて

「アレ、あれが此間死んで甦されたラザロさんですよ」

「まア立派な血色になりましたね」

「それから、此家の旦那はどこにゐます？」

「あれ、後むきになつて、エス様とお話してゐます……」

「ホラ、こつちへ顔をむけました」

「ナル程、あの汚なかつたのが後かたもありませんねえ」

とエス様の尊い御力を驚き合つてゐます。さて招ばれた筈のマリヤはどうしたのでせう、暫く經つてマリヤはお坐敷に見えました、兩手に何やら大事さうに持つてゐます。これを見たマルタ

「まあ、お前どこへ往つてたの、少しはお手傳してもいゝんでせう」

と小言をいふてゐます、マリヤは輕く

「お姉さま、ドウも濟みませんでした」



と詫びて、エス様のおそばへまゐりました。そして手にある大理石の函を破し、中にある膏をエス様のお頭にかけました、それからまたお足につけて自分の髪の毛で拭きました。

膏の香はプーンと人々の鼻に入りました、お坐敷が咽るほど良い香ひになりました、人々は口々に

「ナルダだ、ナルダだ」

と言ひました、これはナルダの膏といつて百圓ほどする香水の膏です、王様とか殿様のやうな方々のお使ひになるものでした。

マリヤは此高價ものを惜しげもなくエス様に差上げましたから、人人は氣でも狂つたかと思ひました、そこでイスカリオテのユダとい

ふお弟子は

「マリヤさん、なんだね勿體ない、それやエス様のためにすてるのも良いが、それよりも貧乏な人に施したら、それだけのお金は大したものだ……」

と言ひました、けれどもエス様はユダのいふことをとめて

「これ〳〵、遣こめるんでない、マリヤは大層えらいことをした、お金持でもないのに、兄さんのラザロは大病でいろ〳〵費用のしたなかに、この百圓のお金は大抵の苦心ではない、それを私のために惜まないのはホントの誠心だ。

私は長く此世にゐない、私に手向けるためのものに相違ない、マ





リヤの爲たことは永久も言ひ傳へられるのだ」

と仰せになりました、あゝナルダの膏、その床しい香はエス様をはじめ人々を喜ばせました、そのマリヤの床しい心の香は今も私共を勵ましております。

# 主の用

橄欖山の麓に點々と家が列んでゐます、續いたり飛び〳〵になつたりして、美しい綠の中に白く見えます。

今日は、エス樣がエルサレムにお入りなさろうといふので、二人のお弟子をおよびになり

「お前たち、御苦勞だがこれから一寸彼方のベテパゲまで往つて驢馬一頭つれて來て頂戴」

「どこからで御坐います?」



「さうさね、名前をいつても解るまいし、あの大きな木が家の横に三本はえてゐる、裏に廻ると小屋がある、それにまだ人の乘つたことのない驢馬が繫いである、……それを曳いて來るのだ」

「何といつて伴れて來るので御坐いますか」

「ナニ、だまつて持つて來ていゝよ」

「でも、それでは泥棒ぢやありませんか……」

「ではね、若し何しにつれてゆくと言はれたら、主の用なりといふのだ」

「へえ、主の用なり、エス樣の御用だといへば解るんで御坐いますか」

「さうだ、往つておいで」

弟子たちは妙なお使ひだと思ひましたが、こもかくペテバゲへゆき、高い木が三本あるところの小舍を覗くと、可愛らしい驢馬の子がゐます。

「あゝ、これだ〳〵」

と索綱をとき、馴れない格好しながら曳きだしますと、家の中から大きな聲で

「オイ〳〵誰だ、……なにをするんです?」

「やあ見つかつた」

「見つかつたもないもんだ、他の所有を」



「いえ、さうぢやないんです、あれ、なんだつけ、なんといふんだつけ……」

「さう〳〵、主の用なり、エス樣の御用です」

すると家の人は顏を和らげて

「あゝ左樣ですか、それは御無禮をいたしました、それならそれと仰しやつて下されば、……えゝドウゾおつれになつて下さい、先生によろしく」

これまた妙な挨拶、二人は顏を見合せながら、曳いて歸りました、

「ね、一體これやドウしたんでせう、先生がお買ひになつたのでせうか」

「さうですねえ、まさかそうでもありますまいが……」

「それとも、貸して呉れたのでせうか、それにしても、あの人はドウして先生と心やすくなつたでせう、不思議ですね」

「なにしろ、心から先生をお慕ひ申してゐる人なんでせう」

やがてベタニヤに着きました、するとエス様は之にお乗りになり、大勢の人々をつれてエルサムにおのぼりなさいました。

これを聞いた人々は四方から寄つて來てお迎え申しました、或者は自分の衣物を路上に布き、或者は花をなげ、或者は手に〳〵樓欄の葉を振りかざし

「ホザンナ、ホザンナ」



と大聲によばはりました。それは「主よ私共をお救ひ下さい」といふことです、全く王様をお迎え申す様な騒ぎでした。

それから、神様にお祈をする殿にお入りになりますと、商賣する者が大勢で羊や牛を曳きいれたり、鳩を賣つたりお金を取替へたりしてゐます。エス様は

「お前達はまた斯なことをしてゐるか、こゝは祈禱する家だ、泥棒の巣ぢやない、さア〳〵出た、出た」

と追ひ出してお了ひになりました、そして近所にゐる憐な病人や不具な人々を癒して下さいました、すると子供たちが、嬉しがつてエス様を見ては

「ホザンナ、ホザンナ」

と大聲に叫びました。ところが此光景を見たパリサイやサドカイの學者や、祭司といふ神殿のお役人たちは、エス樣のお偉いのを妬ましく思ひました、そして遂々おそろしい事を計る樣になります。



# お說教二つ

學者や祭司の長たちがエス樣を妬み、何とかして牢獄に入れるか、それとも殺して了ひたいと考へました、エス樣はチヤンと其心を御存じですから、それとなく、こんなお話を遊ばしました。

（一）

ある富豪が廣い立派な葡萄園を持つておりました、周圍には岩疊な垣根をめぐらし、見樓を建て、葡萄酒を搾る小舍を作つて、これを或るお百姓さんに賴んで、遠い國へ移轉しました。

やがて秋になりました、さぞ善い葡萄が穫れたでせう、澤山のお金が収ることだろうと思つて、主人は、三人の番頭を使ひにやりました。

すると、借りてゐる百姓は無法にも一人を撲り斃し、一人を殺し、一人には石を打ちつけました。

けれども主人は我慢して、モー一度五六人の番頭をやりました、けれども矢張りヒドイ目に遇せて了ひました。

主人はこの恐ろしい仕打を見て腹が立ちましたが、モー一度我慢をしやう、こんどは我家の息子を遣う、まさかにヒドイことはしまい、ところが、之を見た百姓ども



「やア、こんど來たのは嗣子だ、これは甘いぞ、やっつけて了へ、さうすれば此園は私等のものにならア」

と寄つて集つて殺してしまひました、これを聞いた主人はドウするでせう、直にやって來て此悪者どもを討滅し、園は他の正直なお百姓に貸すでせう。

（二）

或る國の王樣がその王子にお妃をお迎えなさるので、大層立派な御馳走をなさいました。

前々より方々へ招待狀をだしておきましたが、當日になつて一人も見えません、そこで大急ぎに使者を立てゝ迎えにやりましたが、そ

れでも參りません。

王樣は氣が氣でなりませんから、またも使者をだして

「モウ仕度が出來ております、御馳走がすっかり列べてあります、今すぐお出で下さい」

と言つて廻らせました、すると招ばれた人達は

「なんだ幾度も〳〵やかましい、私はこれから畑にゆかなければならない」

と出て往き、また或る一人は

「私は貿易に出るところだ……」

といひ棄てゝゆきます、甚しいことに或者は怒つて



「何遍も〳〵うるさいよ、此野郎……」

と言つて打ち殺して了ひました、なんと慘いことではありませんか。すると王樣は大層お怒りになり、これほどまでにして招ぶものを、恩を仇にして不届な者どもだと、早速兵隊をやつて其人々を殺して了ひました。そして家來どもに

「折角、ささへた御馳走だ、誰にでもよいから振舞つてやれ」

と仰せになりました、家來どもは巷に出て、遇ふほどの者を招び込み、お客衣を着せてはお坐敷に通しました、病人もあれば不具もある、乞食も跛もあります、その人々が立派な御馳走を前にして坐りました、汚い着物がかくれてお客樣らしくなつてゐます。

暫らくして王様はお客に挨拶をなさらうと御出御になりました、一同はうや〳〵しくお辭儀をする、王様は

「ドウか遠慮しないで、澤山たべて下さい、……」

と仰しやりながら、側を見ますと、お客衣を着ないものがおります、王様はこれをご覽になり

「やい、君はドウしてお客衣を着ないのです、折角そろへて置いたのに……」

「……」

「それは良くない、私を侮辱にしてゐる、ナニ此處におきました、……あそこに押し込んである、怪しからん奴だ」





とお叱りになり、家來にいひつけて手足を縛り、暗い牢屋に入れて了ひました。

# 問題二つ

エス様の教を厭がる學者たちに二種ありました、一つはパリサイ宗、一つはサドカイ宗といふ教の學者たちでした。

ある時、パリサイ宗の人々は、何とかしてエス様を言ひ誤らせて罪に落さふと思ひ、外貌にはそんな風を見せないで、わざとペコ〳〵しながら

「先生、ひとつ伺ひたいことが御坐います、貴方は私共に教へて、我々は天の神様にお事へ申すのだ、身も心も捧げて信仰しろと仰



せになりますが、ソウすれば政府に税金を納めないでも宜しいのでせうか、この國は羅馬の屬國ですが、皇帝なんかドウでも宜いんで御坐いませうねえ」

と問ひかけました、若し左様だと仰しやつたら、すぐに、エス様を國賊だ謀反人だといつて縛るつもりです。

けれどもエス様は、どんな考慮でそんな事を訊くのかちやんと御存じですから

「お金を出してお見せなさい、……そして此號は誰です」

「皇帝のお姿です」

「さうです、私共は羅馬の皇帝のお世話になつてゐますから、税金

を納めなければなりません、そして神様のものは神様に獻上げるのです、神様にお事へ申すことは身をも心をも碎いて、人のため、國のため、御教のために盡すことです」

と仰せになりましたから、其人達はコソ〳〵逃げて了ひました。

すると、また後からサドカイ宗の學者が來まして、これもエス様を困らしてやろうと、恐ろしく六づかしい問題を考へてまゐりました。

「先生、あなたは死んだ未來があるとお教へになりますが、若しさうだと困ることが出來ませう」

「何故ですか」

「まア、斯うですね、或る家で七人兄弟がありました、そして兄さ



んにお嫁さんを貰つたとします、ところが子供のできないうちに兄さんが死んで了ひました」

「ナル程」

「そこで二番目の人が兄さんのお嫁さんを自分のに貰ひます、ところが是も早死をいたします」

「それから」

「それから三番目の人は同じお嫁さんを貰ひましたが、これも夭死をいたしました、そして七人が七人、そのお嫁さんを貰つて死んで了ひます。

未來に往つた時、そのお嫁さんは、何人の奥さんになりますか、

兄弟七人はイヤ私のだ、イヤさうでないって喧嘩をするかも解りません、如何なものでせう」

こんな六づかしい問題はエス樣にも解るまいと思つて見てゐると、エス樣は平氣なお顏をしてゐらつしやいます。

「さて〳〵、貴君がたは解りきつた事をお尋ねになる、馬鹿氣たことをお考へなさる、天國には嫁だの婿だのといふことはありません、皆、天の使の樣な者になります、そして此世の中の親子や夫婦よりも樂しいのです」

と明瞭お答へになりましたから、これも一言もなく引下つてしまひました。



# 客房

この年も早や四月の初旬。逾越節になりました、全國の男子はエルサレムに集りましたので大層にぎやかで御坐います。

ベタニヤの村にお宿りになつてゐるエス樣も、都に上つて、型ばかりのお祝ひをなさる事になりました。弟子達は

「先生、エルサレムは大層な雜沓で宿屋も貸間もモー一杯です、私達のゆく所は御坐いますまい」

「否、大丈夫だ、これから誰か二人先きに往つて仕度をするがよ

い、さうねヘテロとヨハネに往つて貰ひませう」
「はい先生どこの家へゆくんで御坐いますか」
「どこつてね、解るまいから……左樣、まづいつもの通り都へ入るんだね、すると水瓶を持つた男が往く、その男について往くのさ」
「へえー」
「そして其男の入る家の主人に、今夜先生が逾越をお祝ひなさるお坐敷はどこですかといふのだ」
何のことやら解りません、とにかく二人は出てゆきました。ところが丁度夕方の水汲みをしてゐる女達の中に一人の男がありました。



そして其男のゆく通りついてゆきます。男は氣味がわるさうに幾度も後を振向きますので、肩にかついでゐる水がボタ〳〵頭からかゝります。
二人はをかしく思ひながら、どこまでも從いてゆきますから、その男はアタフタと急ぎます、そして其男のはいつた家に往つて
「御免下さい、御免下さい」
「ハイ、……おいお客樣だよ、これ……」
けれども男は氣味わるがつて出てきません
「おいお前、ドウしたのだ」
といひながら主人は出て來て

「ごちら様で御坐いますか」

「はァ、私共はエス様の弟子ですが、今夕御飯をたべる筈のお房は……」

「はあ解りました、ドウゾ此方へおはいり下さい」

と二人を案内してお二階へゆきました、見ればチャンとテーブルやらお皿やらが列べてあります、ペテロにヨハネは驚愕してゐます。

二人は近所からパンを買つたりして仕度をいたしました、日暮になつてエス様は十人のお弟子をつれてお見えになりました、ペテロ、ヨハネは待つてゐましたことばかり出迎えて

「先生、ちやんと仕度が出來ました」





エス様はニコ〳〵しながら二階におあがりになりました、十人も「ごうも御苦勞でした」と二人にあいさつして、共々お房にはいりました。

此家の主人は丁度ペテバゲ村のお百姓さんとおなじ樣に、人知れずエス樣のために盡した人でした。

さてエス樣は一同をそれ〴〵坐らせ、御自分は上衣を脱ぎ手拭と盤をお持ちになり、弟子たちの足をお洗ひになりました。ペテロは

「先生、もつたいないぢやありませんか、貴君が先生ですのに私達の足をお洗ひになつては濟みません」

「けれども、まあ洗はせなさい、後で譯がわかるから」

十二人は恐る〳〵洗つて頂きました、エス様は上衣を着て元のところへお坐りになり

「ナル程、私はお前達の先生だ、それだのに弟子の足を洗つたのは、お前達に手本を見せるためだ、決して偉がるものでない、他人を敬つて自分を下にするものだ、先刻お前達は何を騒いでゐた……」

十二人は默つてしまひました、といふのは此房に入ると直ぐに弟子達は

「僕達の中で誰が一番偉いだろう」

と言ひだしました、すると氣の早いペテロは

「それは言はずと知れたこと私さ、一番弟子だもの」



「なに左樣でない、輕卒者のお前さんなんか何時も先生に叱られる癖に」

「ヨハネさんかな、先生のお氣に入りだから……」

「なにお氣に入りだつても、年が若いもの」

「ユダ君かな、僕たちより學問もあるから」

「イヤ、矢張り僕さ」

と今まで默つてゐたヤコブが言ひだす、するとシモンは、あの落付いてゐるバルトロマイに偉いところがあると言つてヤコブを貶す、こんな事で、今にも取組みあひになり相な勢でした。

けれどもエス樣が足をお洗ひになつたお手本を見せられては、弟子

達も流石に耻かしくなりました。



# 淋しい御馳走

二階房には早やランプがつきました、ランプといふても今のとは違います、十二人はエス様をまん中にしてシンミリいたしました。

この晩の御飯は、何處の家でも羊を殺し其肉をたべるのでした、そして羊の血は外の入口に塗るのです、けれどもお皿にはたゞパンがあるばかり、外に葡萄の液があるだけです、淋しい御馳走です、イヤこれでは御馳走ぢやありますまい。

エス様は遽に沈んだお顔になりました、シンミリした弟子達はます

ます音なしくしてゐます、そして不思議さうにエス様のお顔を見ております、エス様は思ひきつた様に

「實は、お前達のうちに私を敵に賣る者がある」

電光のやうに此お言葉が彼等の心にひかりました、思はず

「先生、誰ですか」

「……」

「先生、僕ですか」

「……」

エス様はお答になりません、ペテロは氣を揉んで、エス様に倚りかかつてゐたヨハネに、誰だか伺つてご覽なさいと顔であいづをいた



しました、ヨハネは

「先生、それは誰なんです」

小聲で伺ひますと、エス様は

「私がパンを渡すのが其人だ」

とお知らせになり、パンをユダにおやりになりました、ユダ——イスカリオテのユダ——は

「先生、僕なんでせうか」

「さうだお前だ」

ユダの顔は見る〳〵眞蒼になつて、居たゝまらなくなりましたから、外に出てしまひました、離れて坐つてゐる弟子は聞えなかつた

のでユダを買物に出たかと思ひました。

けれども一同は淋しい樣な心配なやうな顏をして、悲し相なエス樣のお顏を見てゐます。

「モウいよ〳〵時機が來た、私の殺される時が來た、これから世界の人類を救ふために死ぬのだ、……さア御飯にしませう」

エス樣はパンをお手にして、神樣にお祈をし、それを割きながら

「これを私の肉と思つておあがりなさい、私はこのパンのやうに、世界の人のために裂かれるのです、忘れないで下さい」

それから葡萄の液をコップに注ぎながら

「これは私の血と思つてお飲みなさい、私は罪ある人の身代りになつて血を流します」

弟子達は頂いて喰べたり飲んだりいたしました。エス樣はまた

「私は間もなく君達と別れなければならない、ドウか私のゐない後、なかよくして下さい、どんな偉いことよりも、人を愛し親切にするほど偉いことはない」

まん圓いお月樣は橄欖山の上から、この二階をのぞいてゐます。

# 拾圓のお金

淋しい御馳走がすみました、お皿やコップがそこに列んでゐます、パンの屑も殘つてゐます、けれども誰も片づけやうともしません、それどころではないのです。お弟子の一人は

「先生、ユダ君は何處へ往つたでせう、おなかぺすいたでせうに」

「さうね、でもユダはモウ來ないだろうよ」

「えーッ」

「おゝ、ユダは首でも絞つて死ぬだろう」



十一人の耳は驚いてこのお言葉を聽きました。

「さうだ罪は恐ろしいものだ、ユダは世界中の罪を私に負はせるのだ、私はそして十字架に釘る、モウ大變なことになる、けれども心配するんでない、どんな事があつても氣を落してはいけません。

唯天の神樣におたよりなさい、また私の言ふたことをお信じなさい、この世の中は私共を苦しめる、けれども天に樂しい國がある、私共は此世の苦に打勝つて天に進むのだ。

私が先に往つてお前達のために仕度をする、仕度が出來たら迎ひに來てあげる」

何事にも疑ひ深いトマスは

「えッ、先生が先きに往く、私達が迷兒になつてしまふでせう、如何して天の國へ往けるんです」

「いや、私は天にゆく途だ、私を信ずれば大丈夫ゆかれる、私は生命だ、私にたよつてゐれば天に往つて限りなく活きます。神樣は一同のお父樣だから決して迷兒になんかなさらない」

するとピリポは

「先生、そのことです、神樣はお父さまでせうけれど、目に見えない方なんですもの、どんな方か見たいもんですね」

「左樣か、神樣を見たい？私を見るのは神樣を見ると同じことだ、



私の親切は神樣が一同を可愛つてくださるのと同じことだ……」

エス樣はなほも

「さつきも言つたが、たがひに親切にすることを忘れないで下さい、神樣も愛の神樣だ、その子供等である君達も愛の子供でなければならない。

いま飲んだ葡萄もさうだ、あれは一本の幹に澤山の枝がでゝ果が結ぶ、私はその幹で君達は枝のやうなものだ、その枝が喧嘩したり、傷をつけたりしたなら如何だ。

よい果が結ぶまい、枝が枯れて了ふばかりだ、枯れ枝をドウするか、お百姓が燒き棄てる、お前達もその樣な目に遭ひたいか。

善い果を澤山お結びなさい、その果こいふのは愛です、人を助けたり、慰さめたり、苦しんでゐる人を勞はつてやることです。

これから後、いろ〳〵苦しいことも辛い事もあるでせう、けれども落膽しては不可ない、天の父樣にお祈するのだ、神樣はいつでもお助け下さる。

他人に憎くまれたら、それよりも先きに私を憎むのだとお思ひなさい、救主を信ずる者は憎まれる、意地わるをされる、けれども決して恐くはない、一生懸命よい事をするのが偉いのだ」

弟子達は、呑込めない顏してゐます、エス樣は

「今、なんのことか解らないでも追て思ひ出す時が來るよ」





ご仰せになりました。

# 恐ろしい籤

「先生、いつかもカイザリヤで仰しやいましたが、やはり十字架にお釘になるんですか、すると貴君は此國の王樣になれないんぢやありませんか」

お話のあとにペテロが斯樣訊きました、エス樣は

「私は此小さなユダヤの國王になつてドウなるものか、世界中を治めになる神樣の獨子が、こんなに小さな國を治めて居られない、私の國は天にある廣い立派な國だ。



お前達は、これまで私を手傳つていろ〳〵難儀したから、其時にはそれ〴〵褒美をあげる!!」

「解りました、それでは私共はどんな事があつても辛棒いたします、決して……」

「いや、ペテロや惡魔はお前達を籤にかけるよ、麥を篩ふやうに、お前達をひつかき廻すよ、氣をつけなさい」

ペテロは元氣のよい人でしたから

「否、引かきまわさうが、逆さまにしやうが大丈夫です」

「いや、仲々さうぢやない、惡魔は强いよ、私はお前のためにお祈りしてゐる、ドウか一同の世話をしておやりなさい」

「先生、大丈夫ですってば、先生のためなら牢屋にでも首斬り臺にでも行きます」

「ペテロや、よく言ふた、けれども今夜あけがたの鷄が啼かない前に、三度私を知らないって言ふよ」

「先生、そんなことが有るもんですか……」

＊　＊　＊

さて此房を出たユダは、日頃エス樣を憎んでゐる祭司の長といふお役人のところへ參りました。

「や、ユダ君、かねて賴んでゐた事は如何ですね」

「はい、實はその事で伺ひました」



「うむ、それは〳〵……オイ、みんな彼方へ行つておいで」

人を離してユダとこそ〳〵話をはじめました。

「では今夜は丁度よいと言んですな」

「は、モウ暫らくしたらゲツセマネに行くでせう、その時が丁度よいんです」

「オイ誰か一寸おいで、……そしてパリサイの學者を招んでおいで」

間もなく四五人の人々がまゐりました、嚴しい風采をした人達です、ユダは以前から此人達に賴まれてエス樣を渡したら褒美を貰ふ約束してありました。祭司の長は

「各位がた、今夜こそは良い機會です、就いては約束の金をユダ君にやりませう」

渡した包は拾圓のお金です、これはユダヤの國で銀貨三十、牛馬のやうに使ふ奴隷を賣買する値段です、心の腐つたユダは奴隷の値段でエス樣を賣つたのでした。

ソロ〳〵恐しい籤が廻りはじめました。



# 月の森

月の光に十二人の一隊が、詩篇といふ昔の「さんびか」を歌ひながら東の方へゆきます、かすかにその聲が響いてゐます。

橄欖山といふ山の麓に、ゲツセマネといふ畑があります、ケデロンといふ小さい流の橋を越えてゐきです。

何十年、何百年とも知れぬ大きな樹の繁つてゐる森はシーンとしてゐます、美しい月の光は森の樹の間を透つて照らしてゐます、ケデロンの川瀨だけは泣くやうな咽ぶやうな音をたてゝゐます。

十二人はその靜かな森に入りました、こゝは都の附近でありながら、大層靜かな所、時々お祈に來た所です。

十二人とはいふまでもなくエス樣と十一人のお弟子です、一人は迷ひ出てゐない。エス樣は

「みんなでお祈をしませふ」

と仰しやつて、ペテロとヨハネ、ヤコブの三人を呼び

「三人は此方へ、あとは此處でお祈しておいで」

三人をつれて、モット奥へお進みになり

「お前達はこゝに待つておいで、少しの間だ……私は苦しくつて仕樣がない、睡つちやいけないよ」



エス樣は少し離れて、ころがつてゐる大きな石に倚りかゝり

「オヽ、父樣よ、天の父樣、私の心はモウ死ぬばかりに苦しう御坐います、そして又まもなく十字架にかけられるのです。もはや堪えきれない程せつなう御坐います。

十字架にかゝらずに世界の人が救へるものなら、のがれたく思ひます、……けれども私は自分勝手をしたく思ひません、あなたの思召に從ひます」

月の光はエス樣のお顏を照してゐますが、大病人の樣に苦しんでゐらつしやいます、汗がだら〳〵それに血がにぢむでゐます、アヽなんとお痛はしいことでせう。

やがて起つてゐらつしやると、三人はグウ〳〵睡つてゐます

「オイ、睡つたのか、疲れてはゐるだろうが、目を醒しておいでよ」

「ハイ、ハイ、相濟みません」

エス様はまた、もとの所へ往つてお祈りなさいましたが、三人はまたグウ〳〵

「おい、また睡つたのか……」

「へい、おいヨハネ君睡つてしやうがない」

「なに、君も睡つたぞろう」

エス様はまたお祈りになりました、そして三人に

「モウ宜しい、お祈が濟んだ」



「……」

「あちらへ往かう、敵が近づいた」

殘りの八人も疲れたのでグッスリ寢こんでゐました。

「あいよ、起きた起きた、惑ふなよ敵が押し寄せた」

間もなく、森の外から炬火が見えました、弟子達はガタ〳〵震へて

エス様の後方に蹲むでゐます。敵の先頭に立つたのはイスカリオテのユダ

「おや先生、さきほどは失禮いたしました」

と倚りかゝりました、これは敵にエス様を知らせる合圖でした。大勢の兵卒はヅカ〳〵寄つてきます、手には劔やら棒を持てゐます。

「君達は誰を探すんです」

「ナザレのエスを」

「おゝ、それなら私は其者です」

この落付いた御威光にうたれて前にゐた兵卒はウーンと倒れました。エス様は

「さア、捕押へて下さい……其代り外の者にはかまはないで下さい、逃しておやりなさい」

ところが後から一人の弟子がおごりでて、やにはに刄を振翳し先方の一人の耳を削落しました。

「あゝ痛たア……」





「これペテロ、何をうろたへる、刄はおしまひなさい……モシゆるしておやりなさい、癒してあげますから」

と、エス様はすぐその耳タボを附けておやりになりました、切られたのは祭司の長の下男でした。

# 盗人の如く

籤がいよ〳〵廻りました、恐ろしく廻りました、ペテロをはじめ他の十人も蛛の子を散らす樣に逃げました、兵卒ごもは難なくエス樣を縛り、勝閧あげてひきあげました。

夜の中にこの計畫が都に知れましたから、どんなことになるか人々は寢ずに待つてゐます。

「ね、おめ〳〵押へられるものか、あの方は」

「さうさ、いろ〳〵不思議なことをする方だから、急に見えなくな



ゐかも知れないよ」

「どうも解らんものだね、いつでもエス樣のお伴をしたあのユダといふのが、今日は兵卒の先頭に立つて往つたとさ」

「なに人違ひでせう」

「うんにや、そうでないから不思議ですとさ」

「では裏切りしたといふものですね」

いろ〳〵の話で持ちきりました、夜は次第に更けました、やがて門の外から松明が見えました。

「おゝ來た〳〵」

ナザレのエス樣は縛られて盗人のやうに曳かれてゐます、首を前に

たれて力氣なく歩いてゆかれます、なぜエス樣はむざ〳〵敵におまけになつたのでせう、これは敵でさへも不思議に思つたのです。

やがてアンナスといふ偉い人の邸宅につれられました、アンナスは氣取りながらエス樣に

「君はどんな事を教えてゐる、そして弟子は何人あるんだ」

「今更ら、私にお聽きになりませんでも、それは誰でも知つて居ります、他の方にお聽き下さい、弟子の重なる者は十二人です」

これを聽いてゐた一人の男は勃然として、ピシヤリとエス樣を打ち

「なんの事だ、このお方に對して無禮な言分だ」

「靜かにおしなさい、何の惡いことがありますか、よく考へて御覽



なさい」

アンナスは、一層のこと祭司の長のカヤパに調べさせた方がよいと思ひ、その方へやりました、アンナスはカヤパの岳父さんでした。

カヤパの邸宅に學者や有力者たちが集りました、周圍は澤山の人々に包まれ、早やどことなく殺氣だちました。

これまでエス樣を嫌惡がつてゐた人々は、此時こそと、ありもしない出鱈目をいふて罪に陷さうとします、けれどもエス樣はこんなくだらない事には何ともお答へになりません。

祭司の長はこの時

「エス君、君はよく我は神の子であると人々に言ふさうだが、ホン

トか、天地をお造りなされた神様の子なんですか」
「然うです、それは確かです、間違ひはありません、私はやがて天の寶位にすわり、世の末には雲に乘つて現はれます」
「ナニ、途方もない、神様は君みたいなしみったれな子をお持ちになる譯はない、君は木匠の息子ぢやないか」
と言ひながら、衣物をヂヤリ〳〵ッと裂きました、これは非常に悲しんだ時にするユダヤの風習でした、そして
「モウ、これだけでエスは立派な罪人です、私は神様の御用をする役人ですのに、此男は神様の子だつて勿體ない事をいふ、私は悲しくつて仕様がありません、神様を粗末にされてたまるもんです



か、皆さんは何とお思ひになりますか」
「さうだ、悪しからん奴だ」
「殺して了へ」
いろ〳〵の罵詈が雨あられのやうに降りかゝります。
「全くです、死刑に處すべきものです、けれども今この國はローマに治められてゐますから、人を殺すにはその許可をうけなければなりません」
と、それから知事さんの政廳へゆく事になりました。

* * * * * *

臆病にもゲツセマネで逃げだした弟子のうちペテロとヨハネは、

盜人の如く

捕まつてゆくエス様のあとからこつそりついてゆきました。

幸ひカヤパの門番はヨハネの知つた人だつたので、ペテロと二人は通して貰ひました、春こはいへ夜は更けて寒う御坐います、兵卒や下男どもは焚火をしながら温たまつてゐます。

「さアさ、おあたりなさい仲々冷へますから」

二人は割込んで温たまりました、そこへヒヨイと來たカヤパの女中さんはそばにゐるペテロを見てゐましたが

「オヤ、この人はあのエスさんのお仲間ぢやなくつて」

ペテロは知ぬ顔をしてゐます、女中は

「ね、貴君、この人は此間エスさんと一しよに歩いてゐましたわ」



と他の人に聞く、ペテロは

「否、さうぢやありませんよ、人違ひでせう」

「左様だ〳〵、此人はあのお仲間だ、ゲツセマネに居た人だ」

「戯談ぢやない、あんな人の弟子ぢやありませんよ」

「だつて先達たしかお説教をしてゐたでせう」

「否、そうぢやない」

ペテロは三度ともエス様を知らないと言ひはりました、若しそうだといへばドンナに耻を掻くかと思つたのでせう、意氣地のないことです。

すると、どこかで鷄がコケコツコーと聲高く啼きました。

その時丁度エス様は知事のピラトの家へ曳れるところで、ペテロの方をジッと御覽になりました、ペテロは「あッ」と思ひ出し、遽に外へとびだしました。

すこし離れて見てゐたヨハネは、心配して後をつけると、薄暗いところで、オイ〳〵泣く聲がします、側によつて見ると夫はペテロでした。

「ペテロさん、どうしたの……」

「……」

「どうしたんですか」

「はい、私は惡かつた、先生に對して申譯のない事をしました、なんと





私は意氣地がないのでせう……」

と後悔しながら、熱い涙をボロ〳〵こぼしました。

# 裁判

夜明がた夢うつゝの樣に呼びたつる聲をきゝ、目が醒めると、まさしく呼んでゐる、ハテ何事かと思つて寢衣のまゝ窓から外を覗くと、何百人とも數へきれぬ群衆が押よせてゐます。

顏色を變へて驚いた、こもかくも着換をと、嚴めしい法服を着たのは羅馬の國から來てゐる知事のポンテオ、ピラトといふ人でした。

この人は何故そんなに驚いたかといふに、これまで二三度、ユダヤ人を怒らして燒打をされさうになつた事がありました、ユダヤの樣





子を知らないで無暗に威張つた事をするためでした、それで此度も燒打かと思つたのです。間もなく家來が

「旦那樣、旦那樣」

と呼びます、ピラトは靜かに

「おい、あれは何事だ」

と小聲にきく、家來は

「あの……一人の罪人をつれて來まして、お調べを願ひたいと申すので……」

「あゝさうか、其樣な事か……」

と胸を撫でおろしました、それで安心して出てゆきますと　大勢は

それッこばかりに

「知事樣、お願ひで御坐います」

「あゝ」

「此者で御坐います、お調べになつて下さい」

「なに、此者はナザレのエス君ではありませんか、何か惡い事をしましたか」

「え、何にも爲ない者はつれてまゐりません」

「何をしました」

「此者は第一羅馬の國に背く謀反人です、……間違つた敎を說いて人民を惑はす者です……自分を神の子だなんて途方もない事





をいふ狂者……、神樣を粗末にする惡魔です」

と口々に惡い事をいふてピラトに聞かせました。けれどもピラトは羅馬で法律を勉强した人ですから、そんなことを迂濶は取上げません。そして

「君はホントに自分のことを王樣だといひましたか」

「左樣です、けれども夫は此ユダヤとか羅馬のことではありません、私の國は天にあります、若し私が此國の王樣にならうとするならば捕つたりなどは致しません」

「では君の敎は人を惑はす樣なものか、どんな事を敎ゆるのです」

「私のは天の神樣の聖旨を傳へるのです、世界のどこへ往つても間

違つてゐない眞理を敎えます」

そこでピラトは何も惡いことをしたのでない、つまりユダヤの學者や祭司の長がエス樣の盛んなのを妬むので斯樣したのだと思ひましたから

「エス君は羅馬の法律を犯してはゐません、もしユダヤの法律を犯したことになるなら、貴君等の法律に照らして罰をおやりなさい」

ピラトはいつもユダヤの人に憎まれてゐます、あんまりすげなくユダヤ人の願を退けるとどんな事になるかも解りませんから、左樣いふたのでしたが、ユダヤ人は



「え、私共の法律に當てはめると死刑にしなければなりませんが、私共には人を殺す權力がありません、羅馬のお役人が、宜しいとお許可くだされぼよいですが」

「ナニ、殺さないでもよいでせう、そんな惡い事しないのですもの……如何です、しかも今は逾越のお祝ではありませんか、罪人をひとり赦すことになつてゐますからエス君を赦したらよいでせう」

すると群衆は

「否、それは不可ません、他の者を赦して下さい、バラバでも」

しかし罪のない者を殺すことは出來ません、何とか群衆をなだめて

と思ひますから、エス樣を一同の前に立たせてピシッ〳〵と鞭で打ちました、兵卒どもは棘で冠をこさへ、紫色の着物をきせて

「ドウだユダヤの王さんか、うまく出來上つた」

といひ乍ら掌でお打ち申しました、紫の上衣は王樣のお召物で棘を金の冕のまねにしたのです、なんと亂暴な事ではありませんか、ピラトは

「これ丈け苛めたらよいでせう、赦してやりませう」

けれども一同は承知しません

「知事さん、十字架に釘げて下さい、十字架に」

「それは無理ですよ、罪のない者を」



「罪がないとは言へますか、謀反人は罪が無いのですか、それなら貴君は謀反人を大事にしますね、すると矢張り謀反人とおなじことになります、よう御坐いますか、知事樣！」

ピラトも氣味が惡くなりました、こゝで復た人民を怒らせると、知事の職をやめなければならない、ドウにも仕方がないから、自分は關係しない方がよいと考へ、臆病にも、水を持つて來さして手を洗ひ

「それでは斯樣します、私は此事件に關はらないしるしに手を洗ひました、殺さうが活かさうが、貴君等の勝手におしなさい、その代り私は關係がないのですよ」

群衆は思ひ通りになつたので

「萬歳!!!」

と大聲に叫びました、モー自分達の勝手です、大よろこびで引き揚げ十字架に釘ける準備にかゝりました。



# カルバリー

「モシ今日の騒はなんです、何が通るんです」

「へえ、お前さん知らないんですか、大變な騒ぎですよ」

「否、私は今田舎から着いたばかしなんで」

これはクレネのシモンといふ爺さん、何事かと思つて訊てみると、兼ね〴〵噂に聞いたナザレの先生が、これから刑場に曳かれてゆくところだといふのです。

シモンは、それは〳〵お痛はしいことだ、あの偉い方がドウして、

そんな事になったのかと、大勢の人々と一しよに立ちながら、考へておりました。

朝の八時ごろ、「來ましたよ、來ました！」といふ聲がします、ナルほど、羅馬の兵隊を先頭にした行列がまゐりました、靜かに靜かに新らしい十字架を擔いだナザレの先生は疲勞と眠らないのとで蒼ざめた首をうなだれて坂をのぼつていらつしやいます。

群衆の中から、兵卒が制止るのもきかないで

「此奴め、ペッ」

と唾をひつかける者、小石を掴むで拋り投げる者もあります、けれどもナザレの先生は少しも聲を出しません、これを見たクレネのシ





モン

「あゝお痛しう御坐います、さぞお辛いで御坐いませうに……」

と思はず叫びました、全く心からお氣の毒に思つたのです。すると之を聞いた兵士は

「おい爺、一寸來い」

シモンは驚いて引きのかうとしましたが、後も横も人で逃げられません、兵士は

「貴樣はそんなに氣の毒に思ふなら、少し手傳つてやれ、……」

「へゝ、おゆるしを願ひます」

「これ横着な奴だ、こつちへ來い、これを擔げ」

仕様ことなくシモンはエス様が擔いでゐなさる十字架の下端をかついでお供をいたしました、群衆はこれを可笑しがり

「やア、爺、似合ふぞ」

などと冷笑しました、エス様の側には婦人の信者たちが泣きながらお供をしました、どんなに悲しかつたか解りません、エス様は

「お泣きなさるな、氣の毒に思ひなさるな、私よりも哀れなのは此國どこの國民です、將來にその報ひが來ます……」

行列がだん〳〵進んで、エルサレムの郊外にあるカルバリといふ小山のうへに着きました。兵卒等は

「爺、ご苦勞だつたね、モウよろしい歸れ、それとも貴樣も一しょ



に釘けてやろうか」

シモンは青くなつて逃げだした。堀つた穴のそばに十字架を倒して下端をひきよせ、エス樣をその上に寢かせました、上衣も下衣も脫がせて兩手をひろげ、一人づゝ押へて、太い釘を手の掌に打ちこみました、紅の血は流れてゐます。

それから足の方も二三人で押へ、骨も筋も碎けよとガチン〳〵、恐しい針の音が人々の心をゑぐる樣に響きます、赤い血が出るにつれてエス樣のお顏はいとゞ蒼味をおびてまゐりました。兵卒は

「よしきた、よしきた、ごつこいしよ」

と掛け聲しながら、十字架の下端を穴にさしこみましたので釘づけ

になつたエス様のお姿が、群衆の目に見えました。

「いよう、見つとも良い王様だ」

「なんと、これが救主だとよ、もし救主だつたら、まづこんなまづい態を廢したらいゝだ」

「へん、棘の冕をかぶつて見あげたものだ」

ワイ〳〵勝手な惡口をいひます、けれどもエス様は一言も仰せになりません。

まもなく其右と左にも一本づゝ十字架が立ちました。

「あれは？何者です」

「弟子でせうか、……」



「イエ、あれはこないだ捕つた强盗で……」

「おゝ、左様ですか……」

兵卒等は側でエス様の着物を鬮引きにして頒てゐます、やがてエス様を憎んだ祭司の長や學者たちが勝ち誇りながら、見物に來ました、其人々は王様のやうな威嚴をつくつてゐました。エス様は天を仰いで

「オ―父様よ、此人々を赦して下さい、知らいで斯様なことをするのです」

これを聞いた人々は

「なァんだ、未だグズ〳〵言つてゐる」

エス様の兩側におかれた强盜のうち一人は

「エスさん、あなたは何といふ不態だね、乃公たちと一しよに殺されるとは、乃公達はこれで人殺しもやつたから、その代り命を渡し、てやるのだが、あなたは人殺しも出來ねえで、オメ〳〵殺されるなんて仕樣がねえ、自分で救主だといつてたといふ事だ、ホントに救主なら、あんた自分で降りるさ、そして乃公等を救つて下さるさ」

すると片方のが

「オイ〳〵、熊さん何を言ふのだ勿體ない、神樣の罰があたるぜ、私等は惡いことしたから仕方が無いが、此お方は何にも惡いことしないのだ。……」



そしてエス樣を見あげながら

「先生、私は申上げるも耻しい罪深い者で御坐います、此世に何一つ善い事を殘さないで死んで終ひます、今更ら悔いても及びません……あゝエス樣、それに御一しよに此苦を受けるのも何かの御緣で御坐います、ドウゾ貴君が天の聖國にお歸りになつた時、あそこで地獄に落ちてゆく不憫な者があつたゞの一度でもお思ひになつて下さいませ、……今までの罪惡を思へば死きれないほど苦しう御坐います、なんとかして助かる事は出來ますまいか、エス樣!!」

間もなく此世を去らなければならぬ强盜は罪を悔いて泣きました、

エス様は肉が裂け血の流れてゐる御苦痛の中より

「おゝ、お前はようこそ心づいた、遲くはない、悔改めて私により縋る者は滅びない、……お前は今日この世を去るが、私と一緒の樂園へゆかれるよ、安心してゐるがよい」

と仰せになりました。その時いつの間にか十字架の前に恐ろしいとも思はず進み寄つた婦人たちがありました、その中の一人はエス様を産んだお母さんのマリヤです、マリヤは自分が刺された樣に苦しみ悲しんでゐます、エス樣は

「おゝ、お母樣お泣きなさいますな、ヨハネが私に代つてお世話をする筈です、お母樣！滿足して下さい、この十字架によつて世界



の人が救はれるのです、私の世に降つた目的が達せられるのです」

さすがに親子の情、他の目にもお痛はしく見えました。ヨハネはたまり兼ねて、泣き頽るゝマリヤを連れてエルサレムに戻りました。

時は早や三時頃、遽に天空は搔曇り、地か鳴轟ろいて震ひました、

エス樣はその物凄い天を仰いで

「神樣、神樣、あなたは私をお見棄てになりますか、世人を亡ぼす代りに私をお見棄て遊ばしますか」

どんなにお苦しかつたでせう、暫らくして

「あゝモウ私が此世に於ての事業が出來上りました」

と大聲に仰しやつて、息が止つてしまひました、他人を恨まず罵ら

ず、靜かに神々しくおかくれになりました。

罪なき尊き神の御獨子を十字架に釘けた時、そのお父樣である神樣も御胸を裂かるゝやうに思召したので御坐いませう。



# イースター

「さうだ忘れてゐた、あのエス君は死んでも三日目に甦かへると言つたが明日は三日目だ、もしや弟子共が骸を匿して、人民を惑はすかも解らない」

「左樣、骸を盜まれないやうに氣を付けませう」

と學者と祭司の長とが相談し、ピラトに賴んで十六人の兵隊を派遣してもらつて、お墓を守らせました、お墓の蓋には嚴重に封印をしておきました。

十六人は四人づゝ交代に立番をしました、怪しい者が來たら追ひ拂ふつもりです、その日も暮れて淋しい夜になりました。

「オイ、淋しいな、墓場はどことなく氣味がわるいね……」

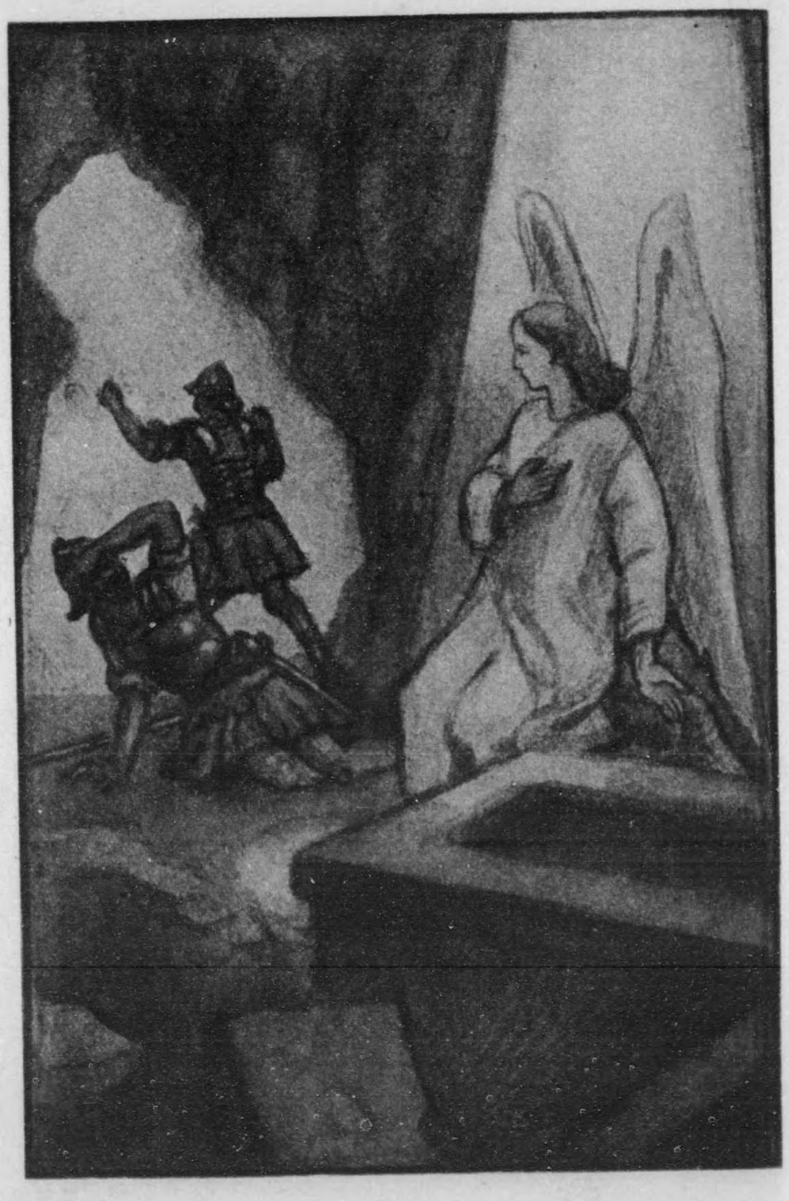
「うむ、僕はこないだ磔刑を見たよ、思ひだしても慄とする、それが此の中に入つてゐると思へば尙ほ更ら氣味が惡い」

だん〳〵夜が更けて、立番も代はり合つてゐましたが、やがて夜も明けやうと東の空が白くなつて來ました、その時ゴウと山も野原もゆるぎ初めました。

「地震だ、地震だ、……」

立番の兵士の體もヨロ〳〵し、眠つてゐた者も目を醒ましました、





田中製版所印行

そして口々に

「ひどい地震だね……」

と言ひあつて居ます、するとすぐ傍のお墓の蓋がバタンと倒れました。

「ひやァー」

と言ひながら見ると、閃電の様に輝くエス様が、こちらへ歩いておいでになります、一同は驚くの驚かないのってありません、眞蒼になつて逃げだしました。

それとは知らずに、エス様を信ずる婦人達はお墓まゐりにとやつて参りました、お墓には大きな石の蓋がある、女の手でそれを除ける

ことも出來ないしドウしたらよいでせうと話しながらゆきます。

「オヤ、朝ばら演習があるのでせうか、兵隊が……」

だん〳〵お墓に着きますと蓋がこれてゐます、

「モー誰かお墓まゐりに來たやうですわ」

「おや、まア……」

と見れば美しい天の使がゐます

「貴女達は誰樣をおたづねになります、……エス樣を、エス樣はね、お甦へり遊ばしたんです、ご覽なさいお墓が空ッぽです」

覗くとナル程、白布がチャンと疊んで二ところにおいてあります、

婦人達はおどろきました、呆氣にとられてゐます、天の使は



「早く、この事を信者の人達にお知らせなさい」

一同は嬉しくってたまりません、お死去になつたとばかりに思つたエス樣が再たお活きかへり遊ばしたのですから、急に元氣づいてエルサレムに馳せ戻りました。

この日は昔の月曜日でしたが、この事あつて後、一日繰下げて此日を日曜日に定めたのです、今の日曜日の起源はエス樣の甦つた日で御坐います。

そして、お生れになつた日をクリスマスといふやうに、お甦りになつた日をイースターと申します。

# 左樣なら

死から活きかへったエス樣は四十日の間、お弟子達にお顯れなさいました、ある時はガリラヤの湖邊、ある時はあの客房のある二階家で、またある時は往來でお會ひ下さいました、そして一しよに御食事をなさったり、御話をなされたりして、いろ〳〵お敎へになりました。

弟子達も元氣になりました、何しろ賴りに思ふエス樣が死にさへもお勝ちなされたのですから嬉しがってゐます。けれどもエス樣は長



く此世にゐらっしやいません、私共の身代りにお立ち下されて、御用がお濟みになりましたから、天にお還り遊ばさなければなりません、これから天にゐて、私共のために御用をあそばすのです。されば四十日經つた時、お弟子達をつれて橄欖山にお登りになりました。

エルサレムは眼の下に見えます——エス樣を苛めた人、はては殺した人達の住んでゐる都も、ゲッセマネの森もカルバリーの丘も、手にとる樣に眺められます。

この前こゝに登りました時は、このエルサレムも長いことはない、敵が攻めに來て亡ぼすよとお話なされました、——弟子達は夫れや

これやいろ〳〵の事を思ひめぐらしました。エス様は

「私は三十三年の間この世にゐて、神様の御用をつとめ、生命をすてゝ成し遂げた、これからはお前達の時代だ、私に代つて、世界の極までも神様の恩惠と私の救濟をお傳へなさい、私はどんな人でも可愛つてやる、救ふてあげる。

これから神様の御力によつて強くなり、生命がけで傳道しなければなりません、私は天にゐてお前達のために祈ります、助けます、懼ることなくお働きなさい。

いづれ、天に行つてお前達のために立派な邸宅を造へたら、また迎えに來ますから、……さ、さ、さようなら」



と仰せられると共に、お體がスウと浮きあがりました、オヤッと思ふ間に、スウ〳〵と上ります、弟子達は

「先生、先生どちらへ……」

と追ひすがらふとしましたが、早や手がとゞきません、呆氣にとられて見てゐると、やがて空高く雲の中へとお入りになりました。

左樣なら

# 荊ある鞭

こゝはガラリヤの北スリヤの國、ダマスコといふ都に近い小山です。北にレバノン山といふ美しい峯のつゞきを眺め、西には白銀いろに輝くヘルモン山が聳えてゐます。

六七人の旅人は東の方に都を眺めながら休んでゐます、都は青玉のやうな棕櫚の樹の澤山ある中に、白い家の列んだ、まことに綺麗な眺望です。

「モウちきだ、あそこに獲物が澤山ゐるぞ」



「左樣で御坐います、それとも私達の押寄せることが知れて逃げたかも解りません」

「さうさね、知れたかな」

「ソロ〳〵出かけませうか」

これはエス樣の宗教が大嫌ひで、信者と見たら誰かれの差別なく、男でも女でも捕へて、牢屋に打込んだサウロといふ人でした。

最初はエルサレムでやつてゐましたが、此度は遙々スリヤの國までも出かけて來たのです。

一行が威勢よく坂をおり初めた時、遽かにピカッと光るものが見えたと思ふと、サウロの眼はグラ〳〵ッと眩むで、ドウと地面に倒れ

ました。

供の者はアレーッと言つて側に馳せ寄りましたが、サウロは坐つたまゝ何か言つてゐます。

「ハイ、私をお呼びになるのは誰樣でゐらっしやいますか……」

供の者はこれは不思議と手を退いて、だまつてゐますと、天の方から聲がして

「サウロ、私はお前の厭がるエスだ、なぜ斯んなに私を責めるのだ、それは丁度智慧のない牛が荆のある鞭を蹴る樣なもので、つまり自分で自分を苦しめる事だ」

サウロはガタ〳〵慄ひだしました。



「あゝ貴君はエス樣……天にゐらっしやるので御坐いますか、アア私は心得ちがひをして居りました、何とも申譯がありません、今まで貴君を普通の人、悪い人ばかり思ひ、神樣と同じ御方とは思ひませんでした。ドウゾこの恐ろしい罪をお赦し下さい」

「……」

「私はこれから貴君の宗教を遵ります、どの樣にしたら宜いので御坐いませう」

「これから市へおいで、今後のことを知らせる人を遣るから」

漸くの事で起ちあがりましたが、眼が少しも見えません、供の者に手をひかれてソロ〳〵坂を降り、やつとこの事でダマスコの市に入り

ました。

サウロの顏は蒼ざめて元氣がありませんでした、そして、珍らしいスリヤの御馳走も美味しくもなければ、食べたくもありません、獨り客室に閉ぢ籠もつて考へてゐます。

サウロはタルソといふ土地のお金持の家に生れ、身分も高く、學問の出來る立派な人でした、それに行爲もよく、パリサイ宗の熱心家でありました。

けれどもエス樣の敎は大嫌ひ、これは何んでも人を惑はす敎で、國の害になるもの、エスといふ人は自分を偉ぶつてキリスト（救主）だと言ふ不埒な者こばかり思ひました。



ですから、エス樣を信ずる人達を亡すのが忠臣であると考へ、しきりにキリスト敎退治をしたのでありました。

遂ひ此間などは、ステパノといふ立派なお弟子を、エルサレムの市から曳出し石で撲ち殺しました、なんと慘い事をしたものです、夫や是やいろ〳〵これまでの事を考へて後悔いたしました。

ところが三日目に、アナニヤといふ人がまゐりました。

「あなたはサウロさんですか、私はアナニヤといふ者でエス樣の敎を傳へる者です、エス樣が君のことを私に仰せになりましたので伺ひました」

サウロは早く誰かゞ來てくれゝば良いと思つてゐたのですから、喜

んで、自分の思つてゐる事を殘らず話しました、アナニヤは

「サウロさん、それは悔改めるといふ事です、今までの事は棄て、これからエス樣に從つて世渡りをするのです、貴君の背いてゐたエス樣は、十字架の上に君の罪をも磔付て下さいましたから、御心配なさいますな、唯エス樣にお賴りなさい……」

サウロの心の苦痛は消えました、重荷をおろした樣に輕くなりました。そしてアナニヤは

「エス樣に賴る者はみな兄弟です、さてサウロさん、これまでエス樣に背いたかわりに、今後は、エス樣の敎を傳へる人にしたいと、エス樣が仰せになります、君はドウ思ひますか」



サウロは

「え、それは何にでもなります、モウ何もかもエス樣の仰せ通りにする覺悟ですから、どんな耻かしいことでも致します」

それからアナニヤはサウロの眼の上に手を按いて

「サウロさん、モウ君の心の眼が開けましたから、この眼も再び見える樣になります」

と嚴にいひますと、雙方からお魚の鱗のやうなものがとれて、もと通り見える樣になりました、サウロはドンナに嬉しかつたでせう。

そして御飯も進み、疲れもなほり、三四日すぎてから會堂にでかけて、エス樣の難有いことをお話いたしました。

ダマスコに匿れてゐる信者達は

「なんでせう、サウロが信者になつた振してゐるんですと」

「え、あれァ、多分私達を油斷させる手段でせうよ」

初めの中は誰も虚偽だろうと思つておりました、けれどもサウロは毎日熱心にお話してやめません、それればかりか、エス様の敎に反對する人があればドシ〳〵議論して負けません。

そこで世間の人々は

「なァんだ、サウロはキリスト敎になつた？、キリスト敎に降參したんだ」

と惡口をいひました。これまで誰にも惡口いはれたことのないサウ



ロはエス様を信じた爲に、惡口をいはれる樣になりました。供の者も

「先生、馬鹿々々しいぢやありませんか、あんな賤しい者共に惡口いはれて、……」

「否、さうぢやない、エス樣のために見下げられるのは難有いことだ」

ところが、あわたゞしくやつて來るものがあります。

「先生、議論に負けた者共は口惜しがつて貴君を殺さうと言つてゐますから、今夜こゝを逃げて下さい」

親切な人々はその晩、無理にサウロを籠に入れ、太い繩で高い塀か

ら市の外へ釣りおろしました。



# ペテロの案内

あしかけ三年經つてから、サウロはエルサレムに往きました、ペテロやヨハネ、ヤコブの樣な重なるお弟子に會ふためでした。

お弟子達は親切にして吳れました、何しろこれまで狼の樣に思はれたサウロが小羊のやうに柔しくなつたのですから、大よろこび、ともごもにエス樣の惠とお力を感謝いたしました。

それからペテロは、サウロを案内してエルサレムを見物いたしました、尤もサウロはエルサレムを知つてゐますけれども、エス樣がこ

こでどんな事を遊ばしたか知りません、ペテロは夫を知らせるのでした。

「月日の經つは早いもの、もう、エス様が天にお昇りになつて九年になります、けれども昨日今日のやうにしか思はれません……」

ペテロは深い思出にたえない樣子をして語りだしました。まづケデロン川を渡つて

「こゝはゲツセマネです、この石に斯して……エス樣が……お祈になりました、その御容姿が……今でも見える樣です」

と言つて拳で涙を拭きました。

「それからユダが來て、つゞいて兵卒があらはれ、斯してエス樣を



捕まへました、私共はナントいふことでせう、臆病にも逃げたのです……エス樣をつれた兵卒どもは此道をひきあげてゆきました」

エルサレムへ歸りながら、途々その時のことを語り、そしてあの二階房の家に立寄りました。

「こゝは御遺言なされた二階です、また甦つてお現れ遊ばした所です。

それから天にお昇りになつて後、私共は百二十人ほど集つて毎日お祈り會をしました、忘れもしません十日目はペンテコステの祝日、その日の朝、天から神樣の聖靈がお降りになつて、私共各自

の心にお宿り下さいました、それからこいふもの、私共はホントに變つた力のある愛に滿ちた者になりました。

その時、あんまり嬉しくて説教しましたら、群衆が感心して一時に三千人、信者になりました、説教した所はすぐ先の廣場です」

こんどは、神様の殿にゆきました、人々は敵味方である筈のペテロとサウロと親しくしてゐるのを驚いてゐます、はや美の門に着きました。

「こゝの所に生來の跛が乞食をしてゐましてね、私とヨハネ君と二人が通ると何か下さいこいふのです、私共は例によつてお金はない、お金よりも良い物をやる、エス様のお力により起てあるけど





言つて癒してやりました。

すると其男の喜ぶことつてありません、ピヨン〳〵飛んでゆきましたが、さア、それから大騒ぎ、誰が癒した、ペテロがした、ヨハネも一しよだこいふ事になつて、二人が遂々牢屋にいれられました、けれども此騒ぎでエス様の救主だこいふ事が人々に解つて五千人ほど信者になりました」

それから、門の中に入る、庭があります。

「ほら、此庭です、あの通り商人がゐませう、鳩を賣つたり獣物を商つたり、あつちの方にはお金を取換る者がゐませう。

エス様が十字架におつきになる五六日前でした、此ところで大層

お怒りになりました」

「えッ、お怒りになつた？、エス様が」

「あのお柔しいエス様がお怒りになつたのです、繩の鞭をおこしらへになつて、お前達は何をするんだ、此所を何と心得る、神樣にお祈をする家だ、商賣も大切だから構はないが正直にするがいゝ、貴樣たちのやうに盗棒みたいな商賣する所ぢやないと、羊や牛をも追ひいだし、商人を追拂つたのです、まことに神々しい御威光でした」

サウロは一々うなづいて聽いてゐます。ペテロはまた殿の中の獻金箱を指さして



「いつかね、あの函に四厘いれたおかみさんがありました」

「へえ」

「子供を抱きましてね、きたない服裝した女でした、私共は、いくら貧乏だつて、あれッばかしのお金をよくも耻かしくなく納れるもんだと思ひましたら、——エス樣は、さうではない彼女は餘裕ある人の百圓、二百圓の獻金よりも澤山獻げたのだとお褒めになりました。

尤もエス樣の仰せになる事は、すべて不思議でした、或時などは小さな幼兒を立たせて、天國で一番偉い者は幼兒だ、大人も改心して此樣にならなければ天國に入る事が出來ないと仰せられまし

た……」

サウロは感心しながら聽いてゐます。

それからカルバリの丘や近所の墓地にゆき、エス樣の十字架のことお甦りあそばした話を涙を流して語りあひ、サウロも目の當りそれを見るやうに感じました。



# 羅馬へ

身分も外聞もかまはずに、エス樣のために、國々町々を廻つて敎を傳へたサウロは、その名さへもパウロと改めて、昔の自分を忘れておりました。

時々は、お金持の坊ちやんだつた事、人々から學者だ天才だと譽められたこと、先祖が偉かつたことなどを思ひださないではありません、けれども、何もかもエス樣のために、破れ草履か何かのやうに思ひました。

「この世の中で逸樂をしたり威張つたりしてもしれた事だ、それよりも、神樣の國に往つてから永遠も幸福に送つた方が益だ」

と自分も思ひ、人にも語りました。

されば惡口いはれる事なんかは平氣です、或時は木の枝でひどく撲たれ、石で擊たれ、牢獄に打ち込まれ、死にさうになつた事が幾度もありました。

この樣な目にあつても、エス樣の敎を傳へてやめません、それがために小亞細亞、ギリシヤやトルコの方へどし〳〵基督敎が傳はりました、之がパウロにとつて何よりの快樂でありました。

この頃、世界で一番强い國は羅馬で、ユダヤの國は勿論、何處の國





も其屬國になつておりました、そこでパウロは羅馬の都に往つてキリスト敎を傳へたいと思ひました。

けれどもパウロを憎む人が澤山あつて、旅からエルサレムに歸つてまゐりました時、大勢よつてたかつて殺さうとしました、ところが折よく此事がお役所に知れたので、羅馬から來てゐる守備兵が、パウロを助けて陣營に入れてくれました。

すると四十人餘のユダヤ人は、ドウしてもパウロを殺さなければならぬ、それまでは飲食をしないと決心し、それを祭司の長に話しました

「うむ、それは感心だ、パウロなんか殺した方が良い」

と賛成してくれました、そこで祭司の長は明日、パウロを取調べると言つて陣營からつれだす途中、四十人が右左から一時に、斬りかかつたらよからうと、相談をきめました。

パウロの命はモウ大風の前の燈火とでもいつてよいか、明日かぎりの壽命となりました、なんと哀れではありませんか。

ところが其日の暮れがた、どこからか一人の綺麗な少年が、パウロをたづねてまゐりました、別に怪しいところもありませんから、會はせてやりますと、大急ぎでパウロにすり寄つて

「叔父さま、……」

「おやドウして此處へ來た?」

「でも大變なことがあるんですよ」
とパウロの耳に口をあてゝ、ヒソ〳〵いひました、パウロは
「さうか、そんな事があるか、よく知らせてくれた」
と喜びました。
この少年といふのはパウロの甥で四十人の陰謀を知らせてくれたのです、パウロはこの甥を千人の長、今ならば聯隊長とでも言ふべき人に會せました。千人の長は驚いて
「明日になると事が面倒だ、今夜の中に……」
と萬一の警備に、四百七十人の兵隊にパウロを護らせ、夜の中にカイザリヤに向つて出發させました。

馬鹿を見たのは四十餘人の者ども、翌日になつて、もうパウロがゐないと聞いて

「なァんの事た、忌々しい、無駄骨を折つた」

と其口惜がりかたも一通りではありませんでした。

カイザリヤでは、知事のペストスや、アグリッパ王のお調べがありましたが、パウロの家柄が立派だつた爲に屬國に生れても羅馬人といふ資格をうけて居りましたので、羅馬の王樣のお調べを受ける事になりました。斯した神樣のふしぎな御導きで、パウロは思はず兼ね兼ね往きたく思つた羅馬へ往くのです。

まづシドンといふ港から、地中海に漕ぎ出しますと、船は西へ〜





こイタリヤを指して進みます、ところが爰にまた恐ろしい災難が起りました。

それは非常な難船、十四日の間、船は木の葉のやうに流され通しです、乘客は荷物も持物も殘らず海に投げすてゝ船を輕くし、はては死を決して流るゝまゝに任せました、何と心細い事でせう。けれどもパウロは

「心配するな、きつと羅馬の王樣の前に立つことが出來る」

といふ神樣のお聲をきゝました。

やがて船はある島の海岸に押しあげられたので、一同は泳いだり、板につかまつたりして岸に着きました、その人數は二百七十六人ほ

ごでした、島はイタリヤの南端にあるメリタ島といふのでした。それから間もなくイタリーの國、これは時の羅馬の本國、その都のローマに着く事が出來ました。

パウロは此羅馬にゐて殺される日まで、言葉にも筆にも熱心こめて傳道いたしました、そして小亞細亞にある教會に書き送つたのが、幾卷も聖書の中に殘つております。



# パトモスの島

小亞細亞の西端、エペソといふ港の南に小さな、しかも崖で出來てゐるパトモスといふ島があります、これはよく罪人を島流しにする所でした。

淋しい荒磯の岩崖に一人の老人が靜に坐り、目を瞑つては祈り、目をあいては筆を動かしてゐます、年の頃は九十にもなるでせう、これは使徒のヨハネです。

この時分は、羅馬に往つたパウロもネロといふ惡い皇帝のために殺

され、ペテロも諸國を傳道して羅馬に來ましたが、これも殺されて了ひました、モウ同じ頃お弟子になつた人々は、みんな此世にゐないのです。

たゞヨハネだけ生きのびました、腰がたゝなくなるまで、息がとまるまで傳道しておりました。けれどもこれも羅馬の皇帝に憎まれ、老人を殺すも不憫とあつて、この島に流されました。

ところが或日の事、まことに不思議なものを見ました、そして、忘れぬやうに書きとめよといふお聲がします、それで筆を採りながら何やら考へるやうにしてゐたのです。

まづ、何とも神々しい筆やことばに言はれない立派な方が輝いてゐ



る天に見えました、ヨハネはそれを見て怖くなり死んだ人のやうになつてゐると

「ヨハネや、怖いことはないよ、私はお前の救主だ、忘れたかと」

と床しいお聲がします、これは天にお昇りになつたエス樣が、天の御榮光に輝いてゐらつしやるのでありました、ナザレの村にお育ちになつて、十字架におつきなされた時とはまるで違ひます。

それから、この美くしくも尊いエス樣と、悪魔の軍勢と戰をはじめます、此世界は悪魔のために大層あらされて了ひます、お金がある の、身分が高いのと威張つてゐた人達も、木枯に吹拂はれる木の葉の樣に、見るかげもない者になります。

そしてエス様は天の軍勢と、天に昇つた多くの信者達をつれて、悪魔を滅ぼし、此世界を平らげ、義しい裁判をなされて、悪い人やエス様に從はない人達を此世界と一しよに滅ぼして了ひ、義しき人、罪から救はれた人々を携れて立派な天の聖國にお入れなさる光景が活動寫眞の様にあり〳〵と見えました。

ヨハネは自分には薩張りわかりません、けれども兎に角、見るがまま に聽くがまゝに筆を走らせました。

書き終りますと、天の使は

「これは此後、世界に起るべき事件なのです、やがて此通りになりますから、油斷のない様に、いつでも信仰から離れないやうにして





て下さい。……聖い國、たのしい天の聖國が皆様を待つてゐます、間もなくエス様は迎へにおいでなさるでせう、……耐え忍んで信仰のためにお盡しなさい、神様のため世の人々のためにお勵みなさい」

と申しました、ヨハネは涙に搔きくれて

「ハイ、解りました、エス様をお待ち申します、それまでは勇ましく働きませふ、愛のために正義のために!!」

やがて幻が消えました。眞紅な夕日は多島海のあなたに落んとし、海は一面に朱の色を注いでゐます、帆をかけた船が幾つも〳〵港の方へ歸つてゆきます。ヨハネは

「あゝ、日が暮れる、……やがて
此世も、終る時が來るだろう」
と深い〳〵心の奥底から出たやうな獨語をいひ、そして西の空に明
星の輝く頃まで祈りつゞけました。

新約物語 終



大正七年五月十三日印刷
大正七年五月十七日發行

新約物語
定價壹圓五拾錢

著作者　野邊地三右衛門　東京市麹町區平河町四丁目十三番地
發行者　土屋泰次郎　横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉　横濱市山下町百〇四番地
印刷所　福音印刷合資會社

發行所　東京市麹町三丁目
振替東京七八四七番
電話番町二八二〇番
丁未出版社